

令和四年十二月

交通安全子供作文集

小・中学校児童生徒の作文第四十五集



思いやりの

横断歩道

一般社団法人 愛媛県交通安全協会

後援 愛媛県教育委員会



伊予銀行

この作文集は、伊予銀行様からご寄付いただいた「交通安全定期預金の積立金」の一部を活用して作成しました。

は し が き

愛媛県交通安全協会・県内十八の地区交通安全協会では、愛媛県教育委員会の後援により、小・中学生を対象に、毎年交通安全に関する作文を募集しています。この趣旨は、小・中学生の情操教育に資するとともに、交通安全についての関心を高め、子供の交通事故防止を図ることを目的に、昭和五十三年から実施しているもので、本年は小・中学校併せて百三十六校から二千七百二十二編という多数の応募がありました。

応募作品について、地元の地区交通安全協会の第一次審査を経た八十六編を、愛媛県交通安全協会の第二次審査で四十二編選定し、更に愛媛県教育委員会に第三次審査をお願いして厳正な審査の上、愛媛県交通安全協会入選作文として二十五編を選んできました。

作文は、子供たちが身近に体験したこと、家族や友達が交通事故の当事者になったことなど、広く交通安全の大切さについて、素直にかつ切実に訴える内容となっております。

今回、入選作品二十五編を「交通安全子供作文集」第四十五集として発刊するに当たり、「愛」をシンボルマークとし、題名は入選作品を代表して、西条市立玉津小学校五年生の浅木湊翔（あさぎみなと）さんの「思いやりの横断歩道」とさせていただきます。

この作文集が家庭、学校及び職場において、一人でも多くの方に読まれ、交通安全への関心と認識をより一層高めていただければ望外の喜びです。

応募していただいた多くの小・中学生の皆様には、感謝いたしますとともに、作文集発刊のために御協力いただいた関係者の皆様には厚くお礼を申し上げます。県民の皆様には、今後とも交通安全協会の活動に御理解をいただき、一層の御支援と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和四年十二月

一般社団法人 愛媛県交通安全協会会長 白 方 信 一

愛媛県交通安全協会入選作文目次

「小学生の部」

たぐさんのかなしいに気づいた日	今治市立吹揚小学校	二年	松本 <small>まつもと</small>	遼 <small>りょう</small>	1
ぼくの通学路でおこったこと	今治市立富田小学校	三年	宮嶋 <small>みやじま</small>	涉 <small>しやう</small>	2
心の中の右左右	愛南町立家串小学校	四年	黒田 <small>くろだ</small>	真希 <small>まき</small>	3
思いやりの横断歩道	西条市立玉津小学校	五年	浅木 <small>あさぎ</small>	湊翔 <small>みなと</small>	4
「相手を思つて」	西条市立西条小学校	五年	宮崎 <small>みやざき</small>	愛魁 <small>あいが</small>	5
交通安全教室に参加して	西条市立楠河小学校	六年	榎 <small>まき</small>	透馬 <small>とうま</small>	6
「あと一秒のやさしさ」	今治市立鳥生小学校	六年	中川 <small>なかがわ</small>	ころろ	7
命を守る茶色のふわふわ	松山市立久枝小学校	六年	菊池 <small>きくち</small>	美緒 <small>みお</small>	8

「中学生の部」

「いつものルールにプラス1」	四国中央市立川之江南中学校	一年	井上	結愛	10
死角に気をつけて	西条市立西条東中学校	一年	高橋	蒼志	11
大切な人を守るために	西条市立丹原西中学校	一年	兵藤	翔馬	12
自転車と僕	愛媛大学教育学部附属中学校	一年	山下	真弥	14
運転免許返納を考える	八幡市立保内中学校	一年	堀江	湊太	15
僕にできる交通安全	宇和島市立城東中学校	一年	小倉	颯介	17
我が家の「交通安全マイスター」	鬼北町立広見中学校	一年	山下	結衣	18
大切な「命」を守るために	松山市立旭中学校	二年	上岡	咲歩	20
母の大切な言葉	松山市立旭中学校	二年	片上	遼斗	21
班長旗の持つ力	愛媛大学教育学部附属中学校	二年	大野	生吹	23
乗り物を運転するときに必要なこと	愛媛大学教育学部附属中学校	二年	三上	茅優	24
明るい未来への第一歩	松山市立内宮中学校	二年	浅野	遥斗	26
免許返納のきっかけ作り	松前町立岡田中学校	三年	西岡	葵	27
「当たり前」と「思いやり」	大洲市立肱東中学校	三年	二宮	菜央	29
安全で幸せな暮らし	八幡市立保内中学校	三年	岡本	日風	30
交通事故は防げる	八幡市立松柏中学校	三年	節安	由珠	32
大切な命を守るために	愛南町立御荘中学校	三年	宮崎	逢乃	33

愛媛県交通安全協会入選作文（二十五編）

【小学生の部】

たくさんのかなしに気づいた日

今治市立吹揚小学校

二年 まつ本 りょう

ある日、お母さんが絵をかくてくれました。その絵には、車とあるいている人がぶつかっていて、パトカーやきゅうきゅう車がかけつけていました。お母さんが、

「これを見て、どう思う？」

と言いました。ぼくは、

「なんだか、かなしい。」

と答えました。

それをきっかけに、どこにかなしいがあるのか考えました。一つ目のかなしいは、じこにあった人です。けがをして、いたい思いをしているからです。にゅういんをすると、学校やおしごとへも行けなくなります。ともだちに会えないことは、とてもさみしいです。

二つ目のかなしいは、じこをおこした車です。あい手にけがをさせてしまうことは、つらいことです。しんぱいな気もちにもなります。だから、お母さんがかいた絵は人も車もないいました。お母さんが、

「そのかぞくはどんな気もちかな？」

と言いました。ぼくは考えました。もし弟がじこにあつてけがをしたら、ぼくはかなしいです。もしお父さんやお母さんが車でじこをおこしたら、ぼくはとてもかなしいです。じこにあった人たちだけではなく、そのまわりのかぞくもかなしいことに気づきました。

「ほかにかなしいはない？」

つづけてお母さんに聞かれました。よく見ると、きゅうきゅう車やパトカーもなっています。

「どうしてないのかな。」

ぼくにはりゆうがわかりませんでした。お母さんが、

「けいさつかんは、まい朝はたをもつて立ってくれたり、パトロールをしてじこがおきないように、見てくれているんだよ。」

とおしえてくれました。

「見たことあるよ。」

とぼくは言いました。その時はじめて、けいさつかんの気もちに気づきました。

お母さんがかくてくれた一まいの絵。この一まいにたくさんのかなしがありました。ぼくは、かなしいことはきらいです。かぞくやともだちがかなしいことも、きらいです。

この日ぼくは、手かみを出すために一人でゆうびんきよくへ行ききました。お母さんのかいてくれた絵が、あたまからはなれませんでした。いつもより気をつけて、道があるきました。右左をしつかり見ました。しんごうが青になつても、まわりを見てからわたりました。

「ただいま。」

といえにかえると、

「おかえり。」

とお母さんがわらつてくれました。ホッとしました。

ぼくはきょう、一まいの絵をきっかけに、こうつうじこについて考えました。今まではじこはこわいだけだと思っていたけど、たくさんのかなしがあることをしりました。車の人も、バイクの人も、あるく人も、おとなも子どもも、みんながこうつうルールをまもり、一つでもこうつうじこがへつてほしいです。かなしい思いはしたくない。かなしい思いをさせたくない。ぼくはこのことをわすれません。

ぼくの通学路でおこったこと

今治市立富田小学校

三年 みやじま しょう

五月ごろ、ぼくの通学路でおそろしいことがありました。その出来事は、帰りの道のみきりでありました。ふだんからそののみきりは通る時に気をつけるように先生やお母さんや周りの大人の人たちに言われていて電車のくる合図がなった時にはかならず止まって入らないように言われていて、みんなもぼくも気をつけていました。

いつものように、友だちと学校から家へ通学路を通って帰っていました。前を歩いていた小学一年生の女の子がのみきりを通った時、色えんぴつをと中でおとしてしまいました。するとその後すぐに、電車が来る合図の音が鳴りだしました。するとだれかが、

「まだ電車が来ていないから、取りに行ってみよう。」

と言ってきました。ぼくはそれを聞いて、やめたほうがいいんじゃないかなと思いました。そこにいたみんなは動かさず止まっていました。その時、電車が来ました。電車は色えんぴつをひきました。すると色えんぴつがこなごなになられて、そのはへんが遠くまでとんでいきました。それを見たぼくはこわくて声を出すことはできず、しばらく動くことも出来ませんでした。周りにいた人たちみんなも動かさず声もだしませんでした。もしのみきりの中に入って色えんぴつをとりに行っていたらひかれていたかもしれないと考えるとむねがドキドキしました。電車が通りすぎてせんろを見ると色えんぴつはこなごなになっていて、一年生の女の子はなっていました。ぼくはこの出来

事がこわすぎて女の子に声をかけてあげることが出来ませんでした。家に帰ってお母さんにそのことを話しました。すると

「色えんぴつは買えるけれど命は買えることができないんだよ。命は一つしかないよ。」と言って、ふあんそうな顔をしました。

次の日のきゅう食時間に、色えんぴつをひいた電車のことのほうそうがありました。ほうそうでも、命は一つしかありませんと言っていました。ほうそうを聞いた時もまたむねがドキドキしてこわくなりました。そしてあの時、中に入ろうと言った友だちにぜったい入ってはだめだとちゅう意出来なかった自分はだめだと思いはずかしくなってきました。

今でもあののみきりの道を通っていると思ひ出します。とてもこわかった気持ちやちゅう意出来なかったこと、女の子がなっていたことなど今なら、あの時中に入って取りに行こうといった友だちに、

「それはぜったいだめだよ。命は一つしかないんだよ。」

と言おうと今は思っています。またないてしまった女の子には、

「だいじょうぶ。」
と言って、近くにいて一しよに帰ります。決められた交通ルールを守っていればみんな楽しく安全に帰ることができると思っています。のみきりで体けんしたことはとつてもこわくてあまり良い思い出ではないけれど、これからは自分とまわりのみんなの大切な一つしかない命を守って、いききたいと思えます。

心の中の右左右

愛南町立家串小学校

四年 黒田 真希

横たん歩道の前、後ろからおじいちゃんの声が聞こえます。

「まき。右、左、右。」

わたしは、「車なんて来ないよ」と思いながら、おじいちゃんの声に合わせて、右左右を見ます。これが、わたしのいつもの登校です。

登校はんの集合場所に行く時には、少し広い道路を渡らなくては いけません。でも、わたしの住んでいる地いきは、そんなに車が通らないので、つい「車なんて来ないよ」と思ってたあまり見ないでわたろうとしてしまいます。そんな時、いつも、おじいちゃんが後ろから声をかけてくれます。

おじいちゃんは、家串小学校の見守り隊をしています。毎朝、いっしょに学校まで歩いてくれます。一年生が重い荷物を持っている時には、

「持つちやるか？」

と言つて、荷物を持つてあげています。わたしもときどき、タブレットたんまつを持つてもらいます。おじいちゃんは、軽々と持つて歩いています。おじいちゃんは、元気だなあと感心しています。

一度、おじいちゃんにどうして見守り隊をしているのか、聞いたことがあります。おじいちゃんは、にこにこしながら、

「理心と真希、家串小学校のみんなに、安全に登校してほしいからだよ。それに、今まで見守り隊でがんばってくれた地いきの人の気持

ちを受けついでいきたいしね。」

と答えてくれました。おじいちゃんは、わたしたちまごのことだけでなく、家串小学校のみんなのこと、これまでがんばってきた地いきの見守り隊の人たちのことを考えてくれているのだと分かりました。すごくかっこいいなと思いました。

わたしは毎日、おじいちゃんに見守られて学校に行っているのですが、交通安全について考えることがありませんでした。でも、いつもおじいちゃんに守ってもらえるわけではないので、自分で交通安全のめあてを持つとうと思いました。

一つ目は、横たん歩道で手をあげることです。交通安全教室で毎年、教えてもらっているけれど、急いでいる時はついわすれてしまいます。急いでいる時でも、必ず手をあげて自分が渡ろうとしていることを運転手さんに伝えたいです。

二つ目は左右のかくにんです。いつもおじいちゃんに言ってもらっている「右左右」を心の中でとなえて、しっかりとかくにんしたいです。おじいちゃん、いつもわたしたちの安全のために見守ってくれてありがとう。暑い日も寒い日も雨の日も、いつもえ顔で歩いてくれるおじいちゃんは、すごいと思うよ。わたしも少しずつ自分で気を付けるからね。おじいちゃんと学校まで歩くのは楽しいから、これからもよろしくね。

思いやりの横断歩道

西条市立玉津小学校

五年 浅木 湊翔

車が信号機のある横たん歩道で赤になったら停止するのは、当然です。だれでも知っていると思います。だけど、最近知ったことがあります。それは、母が運転している車に乗っていると、信号機なんて見えないのに、走るスピードをおそくしている時があります。その先には、信号機のない横たん歩道があります。ぼくはいつも不思議に思いました。いつも通っている道なら分かるかもしれない。でも、ふたん通らない道でも、母は横たん歩道があるとわかっている。ぼくは、母に、

「なんで、スピードおそくするの？それって横たん歩道があるから？」と聞いてみた。母は、

「うん、横たん歩道があるってわかるよ。標識もあるし、横たん歩道が先にあるって道路にマークがあるからね。」続けて、

「ひし形のマークがあると、横たん歩道があるから、歩行者や自転車がいたら、車は止まらなさいといけなさいの、そういう交通ルールだよ。」

ぼくは、思い出してみた。そういえば、道路に書かれたひし形マークを知っている。でも、どんな意味かこの時知りました。

横たん歩道は歩行者ゆう先。だけど、横たん歩道で歩行者が待っているのに、気づかないのか、通り過ぎる車が多いと思います。停まってくれる車もいるけど、片方の道路でも停まってくれないと歩行者はわたれませんか。こういう時はなかなか道路をわたれず、こまります。

ぼくは、今まで信号機のない、横たん歩道では、車が通り過ぎるまで待って、安全確認をしてわたっていました。でも、これは自分だけの安全確認で、車のドライバーに歩行者がいることを気付いてもらい、横たん歩道を安全にわたれるようにしないといけないと思います。ぼくは、車のドライバーに気づいてもらうために、歩行者も、
「今から横たん歩道をわたります」というような意思表示をしたらいいと思います。例えば、幼いときにしていた、手をあげて合図することがかん簡単なことです。また、横たん歩道をわたらないのに、わたるように立って、車のドライバーにご解されることをしないことです。

車にも交通ルールやマナーがあるように、ぼく達歩行者にも交通ルールやマナーがあると思います。道路は公共のものなので、使うみんながおたがいに気を付けて使うものだと思います。そして、自分が正しいルールやマナーで、使っているか知ることも大切だと思います。みんなが正しいルールやマナーを行うことで、防げる交通事故もへると思います。そうやって、みんながおたがいに気を付けることで、安全な社会になってほしいです。



「相手を思つて」

西条市立西条小学校

五年 宮崎 愛魁

一台の車が、前の車に今にもぶつかりそうな距離で走行している。そして急に前に割り込んで入り、相手に怒っている。最近は、そんなニュースの映像をよく見る。それを見ては僕も怖くて、胸がドキドキする。あおり運転のニュースだ。

二〇一七年六月、「東名あおり事故」という恐ろしい事故があった。サービスイリアでの駐車の仕事に注意されたことに腹を立てた大人が、注意した人に暴行をし、それだけでは終わらず高速道路であおり運転をはじめた。そして、加害者は相手の車を高速道路上で停止させ、車から降りるように指示し、暴力をふるった。その結果、後ろから来た大型トラックにひかれて二人の方が命を落とした。

あおり運転をしていた加害者は「自分の方がおられた。」「向こうが割り込んできた。」などと相手のせいにしてばかりで反省もしていない様子だった。車の中には二人の子どもがいて、奇跡的に軽傷ですんだようだ。

暴行され、大型トラックにひかれる親を見て、子どもは何を思っただろう。

僕だったら、悲し過ぎて泣き崩れていたと思うし、怖くて何もできなかつただろうと思う。どんなに謝られても、たくさんのお金をもらつても、絶対に許せない。

お母さんの運転する車に乗っていると、大きなトラックがすぐ後

ろを走っていたり、車が急に割り込んできたりすることがある。すれ違う時に怒って何か言いながら通つていく人もいる。少し前までは、ニュースの中の出来事だと思つていたことが僕や家族にも起こっている。そう思うと更に怖くなる。

あおり運転は、どれだけ自分が時間に余裕を持つて行動したり、交通ルールを守つたりしていても起きる可能性がある。変なことを言つて自分のせいにされたり、うそをつかれたり、家族を失つたりするとても怖いものだ。

一体、僕には何ができるのだろうか。

僕には、自分にできることとして決めていることがある。それは、いつか運転免許を取得して運転をするようになったら「相手を思つて運転をする」ということだ。まずは、自分が気を付けようと思ふことが大切だと思う。相手を思えば、みんなが気持ちよく生活することができるようになる。運転も同じだと思う。

もちろん、今の僕にだってできることはある。

例えば、集団登校をする時に、歩く速さが速かったら、低学年の児童は安全に登校できるのだろうか。自転車に乗っている時、危険な運転をしてしまったら、車を運転している人は、迷惑に感じないだろうか。

僕にできることはまだまだ少ないけれど、相手を思つて行動する場面は、身の回りにたくさんある。すべての人が「相手を思つて」行動することができたら、きっとみんなが気持ちよく過ごせる社会になる。

そんな社会を目指して、僕は今日も「相手を思つて」行動したいと思う。

交通安全教室に参加して

西条市立楠河小学校

六年 楨 透馬

「あつ、ヤバイー」それはぼくが四年生の時に、友達の家で自転車で遊びに行っていた時のことです。家を出てすぐの曲がり角に差しかけた時あまりにも急いでいたので、左右を確認しないで交差点を曲がろうとしました。するとスピードを出した車が突然僕の目の前に現れ、どうすることもできず、ただ、死の気配しかありませんでした。一瞬のことで気が付くと、車が急ブレーキを踏んで止まっていました。まさに危機一髪の瞬間でした。僕の心臓はドクドクと大きく鳴り頭の中は空っぽでした。そのあとはお互いに頭を下げて、そのまま過ぎ去っていきました。何事もなかったかのような感じだったのですが、あの瞬間はしばらくぼくの心から離れませんでした。

今年の一学期に交通安全教室がありました。その時、自転車の乗り方についての話を警察の方から聞いて、ぼくはハッと、あの経験を思い出しました。危険な思いをしたにもかかわらず、一か月くらいしたらすっかり忘れていたのです。警察の方の話を参考にその時の事をふり返って、なぜそうなったのかを考えてみました。

一つ目の原因はスピードがかなり出ていたことです。友達と遊ぶことが楽しみで、頭の中がそのことではいっぱいになっていました。だから自転車のルールは、全く気にしていませんでした。普段走っているときは、スピードを出し過ぎないように気を付けています。僕の家の前は下り坂になっています。だから知らない間にスピード

が出るようになってしまっているので、小さいころから気を付けなさいと家族や祖父から何度も言われました。でも今まで一度も事故がなかったのも、気を抜いていたのだと思います。この経験がきっかけで、スピードの出し過ぎはいけなさいということの確認ができたので良かったと今では思っています。これからはスピードを出し過ぎないように気を付けて自転車に乗りたいです。

二つ目の原因は停止して左右の確認をしていなかったことです。面倒くさい時ぼくは、カーブミラーだけを頼りにして曲がっていました。あの時も確認はしましたが、カーブミラーには何も映っていませんでした。一時停止もせずそのまま曲がろうとしました。警察の方も角度によってカーブミラーに映らない死角があるとおっしゃっていました。だからこそ一時停止をして、自分の目で車が来ていないかどうかを確認することが大切なのだと思います。これから曲がり角では、必ず自分の目で確認してから曲がろうと思います。

三つ目の原因は左側を通行していなかったことです。先生からいつも「自転車に乗る時は左側を通行してください。」と言われていますが、自分が住んでいる地区は、車があまり通らないから大丈夫だと油断していました。スピードが出ていたことと、一時停止をしていなかったことで、かなり大回りになってしまいました。そこに車が来たので危ない状況になってしまいました。いつ、どこで、何が起こるか分からないから、大丈夫だと油断するのは、絶対にいけないことだと改めて実感しました。これからは車が少ないような道でも、気を抜かず、左側通行を守って、自転車に乗りたいです。

今まで毎年、交通安全教室を行っていました。しかし新型コロナウイルス

ウイルスの感染症のえいきょうで四、五年生のときの二年間行うことができませんでした。ぼくは今まで一度も事故を起こしたことがなかったので「またかあ。」と何となく参加していました。しかし今年の交通安全教室で、自分の自転車の乗り方をふり返ることができたので、毎年行われている意味がよく分かりました。時間が経つと忘れることもたくさんあります。だから、これからの交通安全教室は、自分の自転車の乗り方などをふり返る良い機会にしていきたいです。



「あと一秒のやさしさ」

今治市立鳥生小学校

六年 中川 こころ

私の住む鳥生地区は、交通量の多い大きな交差点や、信号の無い細い道がいくつもあって、事故もよく発生しています。

私は、友達の家に行く時、習い事に行く時は、歩いたり、自転車に乗ったりします。

もちろん自転車に乗る時は、必ずヘルメットをかぶります。そんな時は、交通量の少ない安全な道を選んで行きます。

でも、気をつけていても、ドキッとする事があります。

信号の無い横断歩道を渡ろうとする時は、手を挙げて待っていても止まってくれる車は少なく、止まってくれて渡ろうとしても、横を通りぬけていく車もいるからです。

信号の無い横断歩道は、とても危ない所だと思います。

ある時、私のおじいちゃんが車の運転中、信号の無い横断歩道を渡ろうとしている歩行者に気づき、停車したけれど、なかなかその人は渡ろうとしなかったため、発車したところ、たまたま様子を見ていた警察官に車を止められ、注意をされました。

その時、警察官はこう言ったそうです。

「あの歩行者は、あと一秒待ったら横断歩道を渡り始めたかもしれないです。」

私は、ハッとしました。

「あと一秒!!」

このわずかな時間が、おじいちゃんと、歩行者の運命を左右した
かもしれません。

私が青信号で横断歩道を渡っていても、左折・右折をする車が急
いでまわって来る事があります。

そんな時は、

「そんなに急がないで、もっとゆっくりまわってよ。」

と、思う事があったのを思い出しました。

たった一秒、だけど、大事な一秒。

車を運転する大人たちには、「一、二、三」と、ゆっくり呼吸をして、
やさしい運転をするあと一秒のゆとりを心に持っていてほしいと思
いました。

そして、歩行者や自転車に乗る私たち子どもや、お年寄りには、
もう一秒、ゆつくりと回りを確認する慎重さが大切だと思いました。

車を運転する人と、そうではない人と、それぞれが気をつけない
といけない事は、とてもたくさんあって、注意する事もたくさんあ
るなど、改めて感じました。

停車をしたり、道をゆずってくれる人たちの「どうぞお先に」とい
う優しい気持ちと、待ってくれたり、ゆずってくれた人たちへの「あ
りがとう」という感謝の気持ちを、おたがいに大切にできたら。

あと一秒の、心のゆとりがあれば、危険な運転や、悲しい交通事
故は、もっと減らせられるのではないかと考えました。

中学生になったら、私も自転車通学になります。

自転車に乗る私は、歩行者への「どうぞお先に」の優しい気持ち
と停車してくれる運転手さんへは、「ありがとう」と感謝の気持ちを
大切にして、安全に気をつけて通学したいです。

命を守る茶色のふわふわ

松山市立久枝小学校

六年 菊池 美緒

「このふわふわはいや。一人はいや。ママと一緒にがいい。ぜったい
にいや。」

家族で出かけるとき、いつもの妹のぐずりが始まります。泣きな
がら逃げる二才の妹をお父さんとお母さんの二人がかりでなんとか
落ち着かせて、茶色のチャイルドシートに乗せ、ベルトを着けます。
家を出てから五分以上たつてから、ようやく駐車場を出発です。妹
が気に入るようふわふわと名付けられた私の家のチャイルドシ
トですが、妹を乗せるのはいつも大変です。

お母さんのひざの上に乗せて早く出発すればいいのに。泣く妹を
見ながら、私はそんなふうを考えていました。私も妹の年の頃は、
「きゅうくつでいやだな」と思ったことを思い出します。

そんな妹も今は四才です。成長して、聞きわけもよくなり、おと
なくジュニアシートに座っています。大変だった頃がなつかしいな
と思えますが、今考えると、どうしてあれだけ苦労して、乗せてい
たのかな。そんな疑問がわいてきました。

「気になるようだったら、一緒に調べてみようか。」外出先から帰っ
た後、お父さんとチャイルドシートのことを調べてみることにしまし
た。

チャイルドシートが義務化されたのは、平成十二年からです。思っ
たより最近だと思いました。実際に、お父さんが子どもの頃には、

チャイルドシートはほとんど見なかったと聞きました。その頃の六歳未満の子どもの死傷者は、歩行者よりも同乗者の方が多く、子どもたちを守るために法律ができたようです。世界のほとんどの国では、その二十年前には義務化されていて、日本が世界の中でもおそかったというのは意外でした。

色々調べていく中で、私が一番おどろいたのは、警察庁のホームページで公開されている事故動画です。事故にあったとき、シートベルトをした大人のマネキンは座席に座ったままですが、チャイルドシートに座っていない子どものマネキンは、車の前方に投げ出され、フロントガラスに頭が突っ込んでいました。これが自分だったら、と思うとぞっとします。事故のときには同乗者は五階建てのビルから飛び降りたのと同じくらいの力を受けるようです。学校の屋上から落ちたくらいだと考えると、ひざの上に抱いただけでは子どもを支えられません。車のシートベルトは、大人用。子どもには子どもを守るためのチャイルドシートが必要ということがよくわかりました。

チャイルドシートのことを調べてみて、お父さんやお母さんの気持ちが変わりました。妹をひざの上に乗せなかったこと、泣いてぐずってもふわふわに乗るまで出発しなかったこと。これは、妹の命を絶対に守るといふ、家族の決意と優しさだったと思います。そして、今は倉庫の隅にある茶色のふわふわが、これまで私と妹の命を守ってくれたことに気づかされました。

チャイルドシートを使用しない場合、死亡率は二倍になると言われています。使用率は六十パーセントで、今でも使っていない人が多くいるようです。費用がかかる、車がせまくなる、など色々問題もありませんが、何より命を守ることが一番大事だと思います。

私も六年後には運転免許を取れる十八才になります。大人になって、自分の子どもを乗せることもあると思います。お父さんとお母さんがしてくれたこと、私と妹の命を守ってくれた茶色のふわふわのことを忘れず、絶対にチャイルドシートを使うことを誓います。そして、命を守ることを一番に考える責任をもった大人になりたいと思います。



【中学生の部】

「いつものルールにプラス1」

四国中央市立川之江南中学校校

一年 井上 結愛

「いつてきます。」

私は自転車で、弟は徒歩で登校します。小学生の頃は、集団登校で登校していました。通学路はとても安全な道で横断歩道くらいしか、危険な場所はありませんでした。その時中学生が自転車で登校しているのを見て、「楽そうだな。私も自転車で登校したいな。」と思っています。でも、いざ中学生になってみると、自転車に乗って通学するのは、気をつけることがたくさんあると気づきました。

まず一つ目は、自転車は歩道を走れないことです。当たり前のことですが、車道を走るのは少しこわいです。せまい道だと、車が自転車のスレスレを通ることがあるので、かなりヒヤッと思いました。学校でできたヒヤリハットはこのことなんだ思いました。家に帰って家族にこの話をすると、父が、

「車を運転していると、自転車が急にとびだしてくることがあってヒヤッとするよ。」と話してくれました。歩行者、自転車、ドライバーそれぞれが気をつけていることがあるんだなと思いました。私はドライバーの目線になったことがないので、家族に聞いてみることにしました。父はいつも車を運転している時に、歩行者や自転車が急

にとびだしてくるかもしれないので注意して運転しているそうです。弟は、車や自転車は絶対とびだしてくると思っていなければ、よけられないと学校で教わり、そう考えていると話してくれました。祖母は高齢者ドライバーなので、アクセルとブレーキを踏み間違えなようにしているそうです。

こうして、家族に聞いてみると、いろいろな目線でそれぞれ気をつけていることがあるんだなと思いました。自転車、歩行者、ドライバー、高齢者ドライバーの四つのいろいろな目線から分かったことは、とても大切だと思いました。家族みんなが気をつけていることは、命を守る行動だと思います。

一人一人の命を守る行動は、みんなの命を守る行動につながります。ふとした不注意や気のゆるみで、自分が被害者や加害者になることがあります。もし事故がおきれば、少なくとも、二人は傷つきます。そうならないためにも、普段から交通ルールを守り、注意を怠らず、毎日気をつけることが大切だと思います。今、気をつけていることにプラスしてもう一度交通ルールを見直していききたいです。「いつものルールにプラス1」を合言葉に一人でも多くの命が助かる社会になつてほしいです。

私が、プラス1することは、自転車で登校するときに、しっかりとまわりを見て、安全に学校までいくことです。しっかりとまわりを見て登校していれば、人や車との事故がおきないと思っただからです。

このようなルールを一人一人が決めて、その決めたルールをしっかりと守り、いつでもみんなが安心して生活できる社会を築いていきたいです。

死角に気を付けて

西条市立西条東中学校

一年 高橋 蒼志

僕が中学生になって間もない頃のことだ。自転車で走っていると、前を自転車で走っていたおばあさんが急に視界から消えた。びつくりして急ブレーキをかけて前を見ると、白色の軽トラが止まっていた。おばあさんはその白い軽トラにはねられていた。

軽トラから出てきた若いお兄さんは足をガタガタさせながら、今にも走って逃げ出しそうだった。たまたまそこにいただけの僕に「どうしよう。はねてしまった。」と話しかけ、僕の目を見た。僕もあわてたが、「と、とりあえず道路からおばあさんを避難させましょう。」と言って、二人でおばあさんを運んだ。

お兄さんは焦りながらも、とりあえず救急車を呼んだ。消防署に近かったため、すぐに救急車が来て、遅れてパトカーが来た。僕はとりあえずほっとした。警察官に状況を聞かれた僕は目撃したことを次々と答えた。すべて話し終えた後、僕はゆっくりと家に向かった。

家でその出来事を母に話すと、「えー、うそー」と言って驚いた。話しているうちに、急に胸が熱くなった。

今、僕はこうして、今日も当たり前のように「ただいま」「おかえりー」と言いあえた。でも、あのおばあさんは家に帰って、「ただいまー」と言うことができなかった。また、もし僕があの時もう少し早くあの道を通っていたら、僕もおばあさんと同じように事故にあっていたかもしれない。僕たちの「ただいま」「おかえり」は当たり前

のことではないのだ。

そう考えると同時に、「どうして事故が起きたのだろうか」と言う疑問がわいてきた。おばあさんが走っていた歩道は緩やかな下り坂だった。スピードが出ていてそのまま突っ込んでしまったのかもしれない。交差点の手前でスピードを落とし、左右を確認していなかったのが原因かもしれない。また、事故現場は等間隔で街路樹が植えられており、その周辺も草が生い茂っていた。おばあさんは緑色っぽい服を着ていたので、軽トラのお兄さんは、街路樹や葉っぱの色に同化しておばあさんの姿が見えにくかったのかもしれない。

僕はどうしても確認してみたくなかった。数日後、もう一度、母と一緒に事故現場に行き、自分が自転車に乗って歩道を走り、軽トラが出てきた位置から母に動画を撮ってもらった。いざ自分が自転車を運転してみると、前方には視界を遮るものもなく、母の姿も見やすく危険には感じなかった。

その後、母が撮影した動画を見ると、僕が走っていた歩道側は、街路樹や草、電柱などが邪魔をして、それらの陰から急に自転車飛び出してきたように見えた。やはり、あの時、お兄さんからはおばあさんが見えていなかったのかもしれない。

小学生時代に交通の授業で習った「死角」ということ言葉を思い出した。一見見通しが良く、なぜこんな所で事故が起きるのか？と思える場所でも、当事者にしかわからない死角が存在すると教わった。あの時は聞き流していたが、この実験を通して、道には「死角」という見えにくい危険がたくさん潜んでいることがはっきりとわかった。壁、街路樹、草や電柱によって見えにくい所がある。そこではスピードを出して走るのではなく、落ち着いてゆっくり走り、

車に乗っている人も気が付きやすくなるだろう。歩いているときも同じように見通しの悪い所は、特に気をつけて歩く必要がある。また、車に乗っている人も急に人が飛び出してくるかもしれない思いながら運転をすることも大事だろう。安全は両方が気を付けて初めて成立するのだ。

今回の経験を元に改めて自分の通学ルートも見直してみた。ここにも死角となっている危ないところがあることに気づいた。カーブミラー横の死角。緩やかなカーブと塀。いつも留めている車の向こう側。どれも危険な死角だった。あの事故以来、僕はこれらの死角を意識してゆっくり走ることにした。意識しすぎるあまり、どうしても自転車で走行が遅くなり、友達に「遅い！」と急かされることもあった。でも、やはり自分のペースで安全に通学する方を僕は選んだ。

今回、おばあさんと軽トラの事故をきっかけに、その原因を考え、自分の通学路を改めて見直す中で、死角は意識して走行しなければ見つけれないのだとわかった。また、片方だけが気を付けてもだめだ。

今後はそういった場所がないか常に気を配りながら走行し、危険な場所では、時には自分の安全のためマイペースで運転することも大事にしたい。

そして、今日もまた、僕は安全に自転車で乗り、「ただいま」「おかえり」と家族と言ひ合えるようにしようと決めた。

大切な人を守るために

西条市立丹原西中学校

一年 兵藤 翔馬

「交通安全」この言葉を見聞きすると、いつも思い出すことがあります。曾祖母が交通事故で亡くなったあの日のことです。もう十年もたつのに、それは今でも鮮明によみがえり、その度に身震いしてしまふような悲しい記憶です。

「ひいばあちゃんが事故よ！今から病院に行くけん、みんな用意して！」

あの時の血相を変えた母の言葉。しかし、にわかには信じられませんでした。前日、私は隣で暮らす曾祖母の家に行き、曾祖母の育てる野菜をもらって帰ってきたばかりだったこともあり、事故といわれても悪い冗談にしか聞こえなかったのです。なんでひいばあちゃんが事故になんか……うそやろ？曾祖母の笑顔がふと脳裏に浮かびました。すると途端に曾祖母のことが心配になり、私は急いで車に乗り込みました。

病院で曾祖母と会った時には、曾祖母はもう息をしておいでませんでした。冷たくなった曾祖母の手。しかし私はこの事態を飲み込むことがどうしてもできませんでした。とにかく何をしても何を聞いても信じられない。ただ、それだけだったのです。

それからしばらくして、私は事故のことを両親から聞きました。曾祖母はその時、国道の横断歩道を渡ろうとしていましたが、信号の押しボタンを押さないうで渡ろうとしていたようでした。そこは曾祖

母にとっては通い慣れた場所だったし、見通しもよかったからでしょうか。ただ、ちょうどそこに、ながら運転をした車がやってきたのです。運転手は曾祖母を発見することが遅れ、ブレーキを掛けることもできなかつた、ということでした。

曾祖母の葬儀が終わっても、私はまだ事故のことを受け入れられないでいました。ある日、私は自転車で出掛け、家の近所の交差点に立っていました。信号が青になり、渡ろうとしたその時、スピードを出した車が私の前を猛然と通り過ぎて行きました。「危ない！」と思つたその時、腹立たしや怒りの他に、別に強く込み上げる感情がありません。私はこれから絶対に「交通安全」第一で行動していきました。これは私にとって、今までに感じたことのないような強い決意でした。きっと曾祖母がどこかで私を見守ってくれ、後押ししてくれたに違いありません。それから私は、曾祖母と約束したつもりで、交通ルールやマナーに気を付けるようにしました。

例えば私は毎日のように自転車を使いますが、友達と連れだつて移動することが多いので、並進をしないことや自転車同士の間隔を十分に取るよう気を付けています。また私が住んでいる地域は坂道が多いです。傾斜道でのふらつきや転倒を防ぐために、前輪と後輪のブレーキをバランス良く使いながら乗るようにしています。交差点では自分だけでなく、周りの車や歩行者にも目を向け、視野を広く持ちながら動くことにしています。それから交通事故のニュースを見た時には、自分にも起こり得ることだと考えるようにし、日頃の自分の行動を振り返るようにしています。事故を防ぐため車に点検があることをヒントに、私は、自転車に整備不良がないかチェックしたり、ヘルメットに破損や緩みがないか点検したりすることに時

間をかけるようにしています。

最近、横断歩道では車が止まってくることが多くなり、運転手の方が笑顔で私を先に渡らせてくれることが増えました。私はこのことを良いことだと考えます。しかし、私はこのことを当たり前だとは思わないようにしています。私は止まってくれたことに感謝の気持ちを忘れないようにするために、いつも礼をするようにしています。たとえ交通ルールやマナーでも、相手のことを考えて行動してくれる人に対して感謝することが、交通マナーの一層の向上につながると考えるからです。交通ルールを守り、交通マナーを大切にすれば、自分だけでなく多くの尊い命を守ることができるはず。私も交通事故を少しでも減らす一人でいられるよう、大切な人を守れるよう、いつも「交通安全」自他の命の安全」だと念頭において生活したいです。



自転車と僕

愛媛大学教育学部附属中学校

一年 山下 真弥

これから、僕があまり人に話したことのない自転車での苦い経験と、その経験を通して思ったことを話したいと思います。

これは小学二年生の時、僕は友達が自転車に乗っていいかっこいいと思う、欲しくなったのでお父さんにねだって買ってもらいました。それまでは、公園やレジャー施設にあるおもしろ自転車しか乗ったことがなかったけれど、すぐ乗れるようになるだろうと何故か自信だけがありました。そんなことなので、自転車の練習を始めてすぐに、転倒してしまう怖さから肩や腕に力が入り、ペダルをこぐこともできず、練習を数回しただけで、自転車に乗るのをあきらめてしまいました。

それから二年が経った小学四年生の春、夏休みに友達とプールに行くのに、歩いては遠いので、自転車に乗れないといけないことに気がきました。自転車で乗るのをあきらめてからは、お父さんお母さんに、「自転車で乗れなくても生きていける。」と強がり、自転車の練習はしていませんでした。また、前に買ってもらった自転車は、身長が伸びた僕にはサイズが合わなくなっていたので、お父さんに頼み込んで、新しい自転車を買ってもらうことができました。古い自転車は、二年間乗ってくれる人もなく、駐車場の隅でサびつき、お父さんにも自転車にも申し訳ない気持ちでした。

今度は、自転車でプールに行くというハッキリとした目標や

身体が大きくなったこともあつてか、お父さんに自転車の荷台を持つてもらって練習すること一週間、自分でもびつくりするくらいの速さで自転車に乗れるようになりました。その夏は、どこに行くにも自転車で、それだけでは物足りず、毎日のように夕方に「ちよつと走ってくる」と、お母さんに言い残し、重信川沿いを一人自転車で走っていました。当初の目的であつたプールにも友達と一緒に自転車で行くことができました。

そして、自転車にも慣れたその年の冬に、事件は起きました。塾からの帰り、家までは自転車でも十分ならず、それでもさらに近道をしようと、街灯の少ない裏道を軽快に走っていた時、道を横切るおじいさんとぶつかってしまったのです。ブレーキを掛けたので、激しい衝突ではなかったけど、おじいさんも僕も道に倒れこんでしまいました。おじいさんにケガはなかったけど駆けつけたおじいさんのご家族が後から痛みが出ていけないので、警察に行こうということになりました。ぶつかったことに加え、警察に行くという事で、僕の頭の中はパニック状態でした。歩いてすぐの所に駐在所があり、おまわりさんが優しく接してくれたことで、やっと状況を理解することができました。そして、おまわりさんがお母さんをお母さんと呼んでくれて、お母さんと一緒におじいさんに謝罪し、駐在所を出ました。お母さんは、泣いている僕に「おじいさんにケガがなくてよかつたね」「怖かつたやろ。自転車で乗る時は、もっと気を付けないとね。」と、叱ることなく、優しく背中をさすってくれました。

自転車のライトも点けて、ぶつからないように回避行動はとつたものの、夜に街灯の少ない道を走るときは、スピードを落として、

もつと周りに注意を払わなければいけないことを身をもって経験しました。その後は、自転車に乗るのが怖くなり、半年近く、塾へはお母さんに車で送迎してもらいました。

しかし、中学校に進学すると自転車通学になることもあって、心配したお父さんお母さんは、僕を大三島に連れて行き、自転車の楽しさを思い出してもらおうと、しまなみ海道をサイクリングしたり、中学校入学前には、通学ルートをお父さんが一緒に自転車であつてくれたりしたので、少しずつ自転車に乗ることに慣れ、小学校卒業前には、自転車で走る恐怖もなくなり、塾へ行くにも遊びに行くにも自転車は欠かすことのできない僕の足になっていました。

自転車は、行動範囲を広げてくれるし、楽しく便利な乗り物ですが、ちょっとした不注意や過信で危険な乗り物にもなります。僕は、事故や自転車に乗れなくなるトラウマなどを経験して、安全運転への意識を強く持つようになりました。今は、通学で毎日自転車に乗っていますが、お父さんお母さんは、すぐに調子に乗る僕の性格を心配して、「スピード出し過ぎてないか」「交差点で飛び出ししてないか」「グレーチングの上はすべるから、雨が降って濡れてる時は避けて走るんよ」と、うるさいぐらいに注意されます。

自転車は、これからも学校や部活にフル稼働です。事故の教訓を生かし、調子に乗ることなく、安全運転に気を付けたいと思います。

運転免許返納を考える

八幡市立保内中学校

一年 堀江 湊太

僕の祖父は、みかん農家をしている。野球や相撲が大好きで、僕の習い事などの送り迎えも進んでしてくれる優しい祖父だ。その祖父は、去年から認知症を患っている。一昨年までの祖父は、すごく元気で記憶力も良く、自動車の運転もとても上手だった。毎日を楽しそうに生き生きと過ごしていた祖父が、認知症と診断されたとき、僕はすごく驚いた。

僕は心配になって、認知症について調べてみた。認知症とは、いろいろな原因で脳の細胞が死んでしまったり働きが悪くなったりしたために様々な障害が起こり、生活する上で支障が出ている状態のことを指すそうだ。最近の六十五歳以上の高齢者の認知症有病率は、約六百二十万人となっており、六人に一人程度が認知症を患っていることが分かった。今年七十五歳になる祖父が、認知症になってもおかしくはない。

そんなある日、祖父と父が言い争っている声で目が覚めた。運転免許返納についての話だった。祖父はまだ自分で運転ができると言いつつ、父は、返納を勧めていた。もし事故を起こしたら、周りの人まで巻き込んでしまうかもしれないし、祖父に怪我して欲しくないからだと、説得していた。しかし、この日は、祖父も父もどちらも譲らず、話は平行線のまま終わってしまった。

ここ数年、高齢者の判断ミスや操作ミスなどによる交通事故の

ニュースを目にすることが多くなった。その度に、どうしてアクセルとブレーキを踏み間違えるのだろうと、僕は不思議に思っていた。でも、誰もが歳を重ねるとともに老いていく。だから、反射神経や運動神経、判断能力などが衰えていくのは、当然だ。そして、祖父のように認知症を発症した場合は、運転の危険が更に高くなるだろう。だから、僕も免許を返納した方がいいと考えた。

でも、僕たちが住む地域では、都会のように、地下鉄があったり、バスや電車が十分程の間隔で運行されたりしているわけではない。自動車がないと、日常生活が大変不便になる。スーパーや郵便局、病院など、どこに行くのにも自動車を利用する必要があるからだ。だから祖父は、運転をすぐにやめると言えないのだと思う。今まで、事故を起こさず運転し、自由に動き回っていた祖父が、免許を返納するのは、相当な覚悟が必要だろう。いくら父や母が、協力すると言っても、仕事があるから、すぐに動くことは難しいに違いない。自分が必要なとき、すぐに行動に移せないし、家族に迷惑をかけてしまうのは嫌だと、免許返納を拒む祖父の気持ちも理解できる。

免許返納について調べてみると、認知症の方の運転は原則禁止となっており、七十五歳になると、三年に一度の免許更新の際に認知機能検査を受ける必要があるそうだ。高齢者の中には、五十年以上車を運転してきた方もいるだろう。その中には、ずっと無事故の優良ドライバーもいて、運転に自信を持っているはずだ。でも、高齢者に限らず、今まで無事故だからといって今後も無事故でいられる保証はないし、認知症を患っている祖父は、更に危険度が増す。また、祖父は、今年七十五歳になる。次の免許更新時には検査も免れないだろう。その結果、返納を促されれば、辛いに違いない。祖父に限

らず、免許返納については、本人が自発的に行うのが最も理想的だ。しかし、返納者の多くは、家族の説得によるもので、免許停止などの強硬手段による場合も少なくないそうだ。だから、自主返納者への特典が設けられている。その特典とは、「タクシーやバスの運賃割引」「商品券の贈呈」「デパートでの商品割引」「レストランの料金割引」などで、交通関連以外のものも充実しているのは驚いた。よく考えたシステムだと思う。

祖父は、認知症の診断を受けたとき、担当の医師に免許返納について考えるように言われた。しかし、祖父は返納の意志をなかなか持たず、家族のみならず祖父を説得するようになった。そして約半年かかってやっと、祖父自身に自分の状態を理解してもらったことができ、祖父は免許を返納した。僕自身、祖父の気持ちを考えると、「もう運転はやめて。じいちゃんが心配やけん。」と伝えるのは辛かったけれど、もし事故を起こしたら、祖父の精神的・身体的なダメージはもつと大きくなるだろう。だから、家族の判断は間違っていないと思う。

そして、現在。祖父は、大切な自動車という交通手段を失って少し不便にはなったとは思いますが、想像していたよりずっと、元気に生活している。いつか僕も運転免許を取得しようと考えている。ずっと習い事の送迎をしてくれていた祖父に、恩返しをしたい。もちろん、安全運転を心掛けて、……。

僕にできる交通安全

宇和島市立城東中学校

一年 小倉 颯介

僕がこれまでの生活の中で一番危ない目に遭ったのは、小学六年生の時のことです。それはサッカースクールに行く途中で起こりました。

「行ってきます。」いつものように着替えを済ませて、いつものように出かけていきました。僕が住んでいるマンションの前には横断歩道があります。その横断歩道を渡ればすぐに学校のグラウンドです。信号が青に変わったので、のんびり歩きながら横断歩道を渡るうとしていました。その時です。ものすごいスピードを出して黒い車が横断歩道に突っ込んできました。僕は「なんで赤信号なのに車が止まらないんだ。」と心の中で叫び、何が何だか分からず、あまりの驚きで体が固まってしまいました。その黒い車はスピードをゆるめず信号を無視し、ものすごい勢いで走り去って行きました。僕ははっと我に返り、動かなかつた足を動かし急いで横断歩道を渡り切りました。

学校のグラウンドに着いた後、スパイクにはき替える時も、サッカーの練習が始まってからも、しばらく胸のどきどきが消えることはありませんでした。

練習が終わって家に帰ると、母が「信号が青になったらからといってすぐに渡ろうとしたらだめって言っているでしょう。右、左をしっかり確認してから渡りなさい。さっきみたいに車が向こうから突っ込んでくることもあるんだから。」と、いつもより強い口調で何度も

何度も言いました。母と兄は、僕が横断歩道を渡るうとしていたところを、たまたまマンションから見えていたのです。すかさず兄も「もう少してひかれるところだったぞ。あの横断歩道は前も言ったけど、車と自転車に乗った小学生がぶつかって小学生が何メートルも飛ばされたんだよ。その子は軽いけがで済んだみたいだったけど。時々事故が起きている場所だぞ。今日のは死んでもおかしくなかった。青でも右と左の確認して。」と言いました。二人の真剣な顔を見て、本当に僕は危ない目に遭ったんだ、車にひかれなくて良かったと思いました。

家族で夕食を食べる途中も思い出して、もしあの車に気が付かなかつたら、こうやってみんなとご飯を食べることもなかったのかなと思うと、背筋がぞつとしました。この作文を書いている今も、思い出すだけでどきどきします。

それから僕は、信号が赤になれば車は止まるだろうではなく、車はそのまま走り抜けるかもしれないと危険を予測して、必ず自分の目で左右を確認して渡り始めるようにしています。

交通事故をなくすためには、まず一人一人が交通ルールを守るということを意識することが大切です。みんながルールを守っていれば、事故は起こらないはずですが、現実には事故はなくなりません。青信号だから渡っていいだろう、あの車は赤信号だから止まるだろう、あの自転車は歩行者に道を譲ってくれだろうと自分中心に考えてしまうからではないでしょうか。もしかしたら車が信号を無視するかもしれない、もしかしたら自転車はそのままこちらに向かってくるかもしれない、「だろう」から「かもしれない」という考えをみんなが持つことによって事故は減っていくと思います。

交通事故によって辛く悲しい思いはしたくありません。誰だつてそう思っているはずです。事故はいつ自分の身に起こってもおかしくないことです。中学生の今の自分にできることは、まず交通ルールを守ることです。そして、危険を予測して行動することです。何事も意識と準備が大切だと思います。この二つのことを心掛け、事故を未然に防ぎ、たった一つしかない自分の命を自分で守っていかうと思いました。これからも僕にできる交通安全を続けていくとともに、周りの友達や家族にも同じように意識して生活をしていくよう呼び掛けていきたいです。



我が家の「交通安全マイスター」

鬼北町立広見中学校

一年 山下 結衣

みなさんは交通安全と聞いて、どのようなことを思い浮かべますか。

毎朝、ニュースを見るたびに交通事故のニュースが絶えません。追突事故や出会い頭の事故、車対車や車対歩行者、車対自転車、車の単独事故など、事故の種類は様々です。最近では、あおり運転や飲酒運転、スピード違反や無免許運転などの自分勝手な振る舞いで事故を起こすケースもあります。私はそんなニュースを見るたびに「家族や周りの人たちが今日も一日絶対に、無事故で過ごせますように。」と強く思っています。

我が家には、私が名付けた「交通安全マイスター」がいます。それは、母です。どうしてかという点、母は交通安全への意識がとても高く、実際に多くの行動を起こしているからです。いくつか、母の行動を紹介します。

母は、交通ルールで分からないことがあれば、交番に行つて警察官の方に尋ねて教えてもらっています。先日、宇和島にある某すしチェーン店から交差点内に進入する際に、どこの信号を見て交差点に入ればいいのか聞いていました。そして、自分が得た知識はみんなに教えて共有しているそうです。

また、仕事先でも、母は「交通安全マイスター」です。両親が勤めている会社は、十二名の方が運転をしています。母は抜き打ちで運

転手さんの助手席に乗って、安全に運転をしているか確認をしています。その際は、運転手の方たちに、いつも通りの気持ちで運転してもらえるように、雑談をしながらリラックスをもらっているそうです。そして、スピードは出過ぎていないか、車間距離を十分にとることができているか、片側に寄り過ぎていないか、信号の発進・停車を守れているかなど、細かいチェックをしているそうです。できて当たり前のことかもしれませんが、母は、みんなの前でできていたことを褒めるそうです。

つい先日、私が住んでいる団地内で、自転車で鬼ごっこをしている小学生がいました。母は、安全運転で車を運転していましたが、急に飛び出してきた小学生に驚いたそうです。その時母は急いで外に出て、大きな声でその小学生を本気で叱っていました。その日の夜に、その小学生の保護者の方からの電話がありました。

「子供がどのように遊んでいるか、ずっと見張っているわけにはいかなかったので、注意をしていたら感謝しています。子供と自転車の乗り方について話し合います。」と言っていたそうです。

これらのように、自分の家族以外の人たちにも一生懸命な母を見て、

「どうして、そこまでするの。それはママのお仕事なの。」
と聞いてみました。すると母は、

「従業員さんも自分の家族。従業員さんの家族もまた自分の家族。事故をしたら、その人の人生も、家族の人たちの人生も、巻き込まれた方の人生も失われてしまうでしょう。ママが声掛けや行動をすることで、事故をしないようにしようと思う気持ちを持ってもらえるように、大切な従業員さん・家族を守りたいからだよ。」

と言っていました。この話を聞いて、私は母みたいに、周りの人や周りの人の家族、大切な人のことも考えられる女性になりたいと思いました。

交通事故は、自分自身が気を付けていても、巻き込まれてしまうことがあります。いっどこで巻き込まれてしまうか分かりません。ですが、母のように、交通安全の大切さを日頃からよく考え、気を付けて行動することができる人が一人でも多くなれば、失われてしまう命が、助かる命に変わるかもしれません。

こうして私も、母の影響で交通安全を意識するようになりました。母のおかげで私は、運転する人の気持ちを考えることができるようになりました。信号のある横断歩道を渡る時は、たとえ青でも慌てて渡りません。きっと母なら、歩行者とアイコンタクトをとるはずですよ。私も、運転手さんとアイコンタクトをとって渡るようにしています。また、私は母の車の助手席に乗って、一緒にしていることがあります。それは、車で発進する時に、母と一緒に「右見て左を見て右見て出発」の安全確認をすることです。母は言います。

「あと数年したら運転免許を持つでしょう。こうやって、いつも安全確認をする癖をつけておいたら安心だから。」

これからも、我が家から地域へと、交通安全の意識の花を植えていきたいです。そして、私も「交通安全マイスター」を引き継いでいきたいと思います。

大切な「命」を守るために

松山市立旭中学校

二年 上岡 咲歩

「あぶない！」

大声の直後、乗っていた車が急ブレーキと共にガンッ！バリバリ！と聞いたことのない音をたてて、大きくゆっくり止まった。初めて体験した交通事故だった。私が小学五年生の夏休みの出来事である。その日、私達はいとこ達と久しぶりに集まり、遠出をした。その帰り道。

「こっちの車に乗りたい。一緒に乗らせて。」と私はいとこの車に乗り込んだ。両親は少し先に出発し、私達は夕食の買い出しをして帰ることになった。車の中で、「帰ったら花火をしようね。一緒に寝ようね。」と楽しくてしかたがなかった。

私達の車は直進していて、相手の車は信号のない交差点から出てきた。運転していたいとこのお母さんは「まさか出てくると思わなかった。」と言っていた。そう思いながらも、少し減速しながら通過しようとした矢先、スピードを上げて車はせまってきた。前方からも対向車が来ている。後部座席には子供たちが乗っている。いとこのお母さんは、どうしようもできない状況がとても怖かったと言っていた。車の右側はライトが割れ、ドアもかなりへこんでしまったが、私達にけがはなかった。私達は後部座席でシートベルトをしていたため、しっかり座席に固定され、守られたからだ、相手の車は一時停止したが、運転手は降りてくることなく走り去ってしまった。楽しかった時間

が、一気に、暗く悲しい思い出になってしまった。

でも、もしあの時、シートベルトをしめていなかったらどうなっていたのだろうか。急ブレーキの瞬間、ギュッとシートベルトが強くしまったのを覚えている。あの力がなければ、私達の体は前方に投げ出されていたかもしれない。足元にすべり落ちて、骨折していたかもしれない。いとこのお母さんは、「車に乗るなら必ずシートベルトをしなさい。できないなら、乗せられないよ。」と私達に何度も言っていた。少し面倒だなと思いつつも、あの日、あの言葉が命を守ってくれたのだと感謝している。

後部座席のシートベルト着用について調べたところ、非着用での致死率は高速道路で、着用時の約十九・四倍。一般道路では、着用時の約三・五倍と非常に高くなっている。しかし、運転席、助手席でのシートベルト着用に対して、後部座席のシートベルト着用は意識が低い。運転席・助手席の着用率はともに九十六%を超えているが、後部座席の着用率は、一般道路で四十二・九%と運転席、助手席に比べ、低い数字となっている。

なぜ運転席・助手席の人はシートベルトをきちんと着用しているのか。疑問に思い、これも調べてみた。すると、シートベルト着用については警察の取り締まりがあり、違反すれば減点されるということがわかった。もし、こういう罰則がなければ、着用率は低いのだろうか。シートベルトをきちんと着用することは、自分の命はもちろん、同乗した人を守るために必要であり、義務であると思う。

日本中で、毎日どこかで交通事故が起こっている。自動車は日々進化していて、車線からはみ出した時や、すぐそばに人や物があつた時にセンサーが鳴ったり、ブレーキが作動して停止したりする機

能も、最近の車には標準装備でついている。それでも、テレビで交通事故のニュースを見られない日はない。事故から何年たっても、悲しみは尽きず、未来を見られない遺族もいる。事故を自分の責任と認めず、何年も裁判をした人もいる。どんなに車の機能が良くなっても、運転する人はハンドルを握る上で、命と死と隣り合わせだという意識が大切だと思う。

私は、まだ車やバイクを運転することはできないが、高校生になれば、自転車で通学することになると思う。自転車は車道を走らなければならぬが、家族と出かけていると、車の横スレスレを走り抜けていく自転車をすることも多い。その度、母達は「危ないね。曲がるときは特に気をつけなきゃ。怖い。」と言っている。車道を走ることではなくても、車と自転車は同じではない。お互いがルールを守り、ゆずり合わなければ大切な命を奪い合ってしまうのだと感じている。

松山市は高校生にヘルメットをプレゼントしてくれる。「かつこ悪いし、恥ずかしい。」と思ってしまうが、父は「このヘルメットが前頭の頭を守るんだ。絶対に必要なんだよ。」と話してくれた。

シートベルト、ヘルメット、共にかけがえない自分の命を守る物。少しの手間を惜しまず必ず着用したい。そして、自分の周囲の人にも着用を呼びかけたいと思う。安全運転のために。何より大切な「命」を守るために。

母の大切な言葉

松山市立旭中学校

二年 片上 遼斗

母が毎日のように言っている言葉があります。「スピード出されんよ。」この短い言葉を僕は毎朝となりで聞いています。僕の兄は高校二年生で、学校は長い下り坂を降りたところにあります。たくさん高校生がその坂道を自転車で下って登校しています。母は毎朝同じことを繰り返すのです。僕は、また同じことを言っていると心の中でつぶやきながら朝の支度をするのが日課となり二年目を迎えました。

夏休みに入った平日の八時ころ、いつもは通らない朝の時間帯に僕は車の助手席に乗って高校野球を観るため、兄がいつも通る坂道を下り球場へ向かう途中でした。学生服を着て自転車に乗る高校生が何人も猛スピードでその坂を下るのです。そして、その中にはヘルメットをかぶらず自転車に乗る高校生らしき人もいました。ほとんどの人が車と同じくらいのスピードを出し、とても急いでいるように見えたのです。朝の時間帯は高校生だけではなく車を運転する大人も急いでいるように感じました。よく通る道だけれど僕が通る時と少し違う光景に見え、なんだか恐ろしく感じた瞬間でした。その日の夜、朝の光景を兄に伝えると、毎年何人も高校生が坂道でこけてけがをしているという話を聞きました。スピードの出過ぎが原因であること、雨の日はタイヤが滑るので自転車で転倒する人が多いということを教えてくれました。兄は、雨の日は視界が狭いので特に気

を付けて自転車に乗っているんだと言い、同級生の中には入学して、一か月も経たないうちに登校中の坂道で車と衝突し入院して、それ以来自転車に乗るのが怖くなった人もいるそうです。

自転車での交通事故の原因はスピードの出し過ぎだけではないと考えます。信号を守らなかつたり、前方、後方を注意していないなど、ルールを守らず事故につながるものが多くあると思います。僕はまだ兄に比べると自転車に乗る機会が少ないけれど、自分が高校生になり毎日自転車に乗る日が来た時に、自分の命をしっかりと自分で守るために中学生の僕が、今すべきことをもつと真剣に考えなければならぬと深く感じました。これからは普段自転車に乗る時はスピードの出し過ぎはもちろん飛び出しを絶対にしないこと、交差点での一時停止と安全確認、信号を守るなどのルールをしっかりと守り安全運転に努めていきたいです。朝の時間帯は通り慣れた道でも危険がひそんでいることを改めて知りました。いつも通ってよく知っている場所だから大丈夫なんて思わないこと。朝は特に時間に追われることが多いので、時間にゆとりを持ち家を出ること。これらのことをいつも頭に入れておきたいです。

僕の住んでいる愛媛県は、自転車保険の加入が義務化されています。愛媛県はサイクリングの人氣も高いので大変良いことだと思います。兄も自転車保険に入っており、母に聞くと「どれだけ注意していても事故を確実に防げるわけではないから毎日自転車を運転する以上は決して無駄な出費ではないよ。」と話していました。兄はどこへ行く時も必ずヘルメットをかぶります。ちょっとその自動販売機まで行く時も絶対にヘルメットをかぶり自転車に乗ります。僕はすぐそこまでだし近くだからいいかとヘルメットをかぶらないことが

あるけれど、兄の姿を見て見習おうと決めました。近くだからいいやという気持ちが大きな後悔になった時に必ず「あの時ヘルメットをかぶっていたら」と考えるとと思います。そうならないためにも、距離に関係なく自転車に乗る時は絶対にヘルメットをかぶるようにしたいです。そして、兄のように一〇〇パーセントヘルメットを着用する高校生がもつと増えていけば良いなと心からそう思います。毎朝、登校前に聞いている母の一言がきつと兄に伝わっているのだと思います。高校生になり、一度も自転車で転倒したことがない兄と、「スピード出されんよ。」と毎日のように言い続ける母の二人の心がつながっているような気がして、そばで聞いていて強いきずなを感じるようになりました。これからは、僕も毎朝しっかりと母の言葉を聞いてから登校し、心配してくれる母に迷惑をかけないようにしたいです。交通ルールをしっかりと頭に入れ、両親がくれた大切な命を自分で守り、毎日を元気に過ごしたいです。



班長旗の持つ力

愛媛大学教育部附属中学校

二年 大野 生吹

僕には三つ年の離れた姉がいる。小学校に入学したとき、集団登校の集合場所まで姉と一緒にいった。毎日ランドセルは重たく、それに加えて月曜日には洗った上靴や体操服などが入った手提げ袋を両手に持って登校した。夏場には水筒を斜めにかけて。雨が降った月曜日は最悪だった。集団登校では、先頭と最後尾に六年生の班長と副班長がいて、その間で一年生から順に並んで一列になって歩く。班長は黄色い班長旗を持っていて、横断歩道を渡るときにそれを広げて横断歩道の中央に立ち、班の全員が渡り終わるまで見守ったあと、走って先頭まで戻ってくる。登校班に一年生は僕一人だったので、僕は班長と一緒に先頭で歩いた。班長は僕に合わせてゆっくり歩いてくれたり、月曜日には手提げ袋を持ってくれたりした。班長は手提げ袋をランドセルに挟んでいて両手が空いていた。それが僕にとってはとても格好よく、すぐに真似をした。また、班長は学校で作ったナップサックをランドセルの外側にかけていることもあった。僕はそれも真似をした。とにかく班のみんなを守ってくれている班長に憧れ、あんな六年生になりたいと思った。

僕は六年生になって班長になった。僕の班にも一年生が一人入学してきた。僕は早めに家を出て入学間もない一年生を家に迎えに行っていた。月曜日には手提げ袋をもってあげた。また、一年生に合わせて歩いた。横断歩道では当番の保護者や先生がいてくれることが多かった。

たので、「おはようございます」と一番大きな声であいさつした。そして、旗を広げて横断歩道の中央に立ち、班員みんなが渡り終えたら止まってくれた車の人に「ありがとうございます」と大きな声で言って礼をしてから先頭に戻った。あの班長旗には不思議なパワーがあつて、僕は班長旗を持つていたおかげで、遅刻や欠席を一度もすることなく、卒業するまで班長をやり遂げることができたのだと思う。

中学生になると、集団登校ではなくなり、姉が自転車で学校までの道を教えてくれた。道だけでなく、待ち時間の長い信号機や歩道のない道、信号機のない車通りの多い交差点など、学校に行くまでに通る危ない場所もたくさん教えてくれた。小学校のような登校班はもうないので、自分の身は自分で守らなければならないと強く意識するようになった。また、自転車をこぐ自分が加害者になる可能性があるとも感じた。登校途中、集団登校している小学生の列を追い越すときがある。そのときは最後尾の副班長に気付いてもらえるよう、ベルをチリンと鳴らす。気が付いた副班長は班のみんなに自転車がかかるから避けるように注意してくれ、僕は避けてくれたのを確認してから急いで追い越す。集団登校のない小学校もあることが分かった。そのときは一人一人にベルをチリッと短めに鳴らす。雨の月曜日は集団登校がないと一人で大変だ、かわいそうに、頑張れよと思いつながら急いで追い越した。

僕は、自分の通った和気小学校に、集団登校があつて良かったと思う。重たいランドセルと荷物を持って一人で登校するのは、小学生にとつても、追い越す自転車や車にとつても危ないと思うからだ。入学して初めは重たい荷物を持ってとにかく歩くことに精一杯だし、交

通ルールもまだよく理解できていなかった。そんなとき、班長が守ってくれて、嬉しかったし、たくさんのことを見て学ぶことができた。また、みんなで注意し合いながら毎日登校することで、ケンカをすることもあつたけど、一人じゃないから頑張れることもたたくさんあつた。そして、自分が班長をすることで、班全体を見て、考えて行動することもできるようになったし、学んで得たことを下級生に伝えることもできた。そして今、自転車通学をしているときも、登校している小学生たちの気持ちを知って動くことができている。これらのことを僕は集団登校から学んだ。時間に間に合わない子を誘いに行ったり、歩くのが遅いとか靴を踏まれたとか言い合つてケンカしたり、二列になって副班長に注意されたりしたことすべてが、今ではいい思い出で、いい経験になっている。

今でも和気小学校の前を通ると、ときどき先生が門にいらつしやるので、僕は大きな声であいさつをする。先生も「おはよう」「おかえり」と言ってくれる。それが僕にとってはラッキーに思えて「元気が出てくる。僕が小学一年生のとき班長だった兄ちゃんの前で自転車を追い越されるときもある。僕はまだまだ敵わないと思いつながら必死であとを追いかけた。

大人になったら車に乗ることもあるだろう。雨に濡れない、重い荷物を持っていない車だからこそ、僕は荷物の多い小学生や自転車をこぐ中学生、高校生の気持ちがかかる大人でいたいと思う。そうやって相手の気持ちがかかり、思いやれる大人が増えたら、交通事故や迷惑運転は減るのではないかと思うからだ。

乗り物を運転するときに大切なこと

愛媛大学教育学部附属中学校

二年 三上 茅優

私は、中一の冬に自転車通学を始めました。学校までは片道七キロメートルと遠いので、中学入学当時はバスで通学をしていたのですが、乗り継ぎにかかる時間が長いのが嫌でした。母に「危ないから」「体力的に心配だから」とずっと渋られました。が、何度も何度もお願いをして、自転車通学を許してもらったときは嬉しかったです。乗り遅れてしまうと次の便まで何分も待たなくてはいけないバスと違って、自転車は出発と到着の時間が自由です。バスを降りてからと違って、教室までの徒歩の時間が短いので、教科書やお弁当など重い荷物がたくさん入ったカバンを運ぶのも比較的楽です。自転車通学は良いことがたくさんあります。その一方で、自転車を漕いで長い距離を移動すると、ドキッとしたりヒヤッしたり、さまざまな経験をすることが多くあります。私は毎日の自転車通学で学んだことをもとに、次のことに気をつけるようにしています。

一つ目は、余裕を持つことです。自転車は出発時間だけでなく、ペダルを踏む力次第で速度を自由にコントロールできるのでとても便利ですが、時間ギリギリで急いで行動することはないようにします。通学中は、会社や学校に行く車やバイク、自転車などがたくさんいますが、中に焦ってスピードを出しすぎているんじゃないかなという人にも出会います。止まれの標識を無視したり、無理やり追い越そうとしたり、自分の時間優先でルールを守らず自分勝手な運

転をしていると事故を起こしかねません。特に雨の日は、車の台数が不思議なくらい増えます。いらついた様子で運転している車も少なくないです。渋滞の長い列を早く抜け出したいのか、信号の変わり目に突っ込んでくる車を見ると、そんな気がします。傘をさして歩行者もレインコートを着た自転車もみんな前が見えづらいいし、地面が滑りやすくなっているのでバランスを崩しやすいし、本当ならいつもよりスピードを落としてほしいくらいです。辺りの人みんなへ声を大にして言いたいですが、まずはなによりも自分が余裕を持ちたいです。だから私は、ちょっと早めに家を出るよう心がけています。

二つ目は、周りをよく見て運転することです。自転車通学を始めるまで気づかなかつたのですが、地面は思っているよりも平らではなくガタガタしています。一見小さな溝でも、自転車の細いタイヤは簡単にはまってしまうので、私はそれで転んでしまったことがあります。たまたま周囲に私しかいませんでしたが、あとで「もし近くに車や歩行者がいて自分以外の誰かを巻き込んで大事故を起こしていたら」と想像したときは、恐くてすぐドキドキしました。その日は私が転んだだけで済んだとはいえ、膝をすりむいてしまったので、そのこと以来自転車はもしものときにとも無防備な乗り物だということも自覚して運転するように心がけています。

三つ目は、他者を思いやって運転することです。この頃、スマートフォンを触りながら歩いている人や自転車に乗っている人を多く見かけます。もし私がよけなかつたら、そのままこちらに突進してぶつかっていたんじゃないかという時すらあります。こちらがよけたことに気づいたさえ分らないときは、なんだか自分勝手だなぁと腹立たしい気持ちになります。スマホの「ながら運転」は道路交通法違

反です。調べてみたところ、自転車の運転手でも五万円以下の罰金で処罰されるそうです。交通ルールは、事故の数を少しでも減らし、みんなが安全に暮らせるためにあるのに、決まりを破ったときの罰を決めないと守れないのは正直残念です。もし、ながら運転をする人が、警察の取り締まり現場じゃないから、今は学校の先生が見ていないから、と場面によって態度を変えているのだとしたら、それはとても腹立たしいです。道路を通行するすべての人に思いやりのある運転をすれば、ルールや罰則に縛られなくても、自然と安全運転になると思います。私は、ひとつひとつの交通ルールがどういう理由で定められているのか意味を考えながら、人にやさしい自転車運転を心がけたいです。

毎朝、私や兄と妹が家を出る時、母は必ずそれぞれの人に「気をつけて」と声をかけます。声が小さかったり、うっかりいつてきますを言い忘れたりすると、母はわざわざ呼び止めて「いつてきますは？」と催促してきます。そしていつも通り「気をつけてね」と言います。そのことに気づいてから私は、毎朝の会話と同じように、「交通安全に気をつける」ことを日々ごく当たり前にできるようになりたいと考えるようになりました。誰しも大切な家族がいると思います。そして皆、家族の安全を心から願っています。あらゆる乗り物を運転するすべての人が、そんな当たり前に気づき、より安全に気遣う世の中になればいいと思います。

明るい未来への第一歩

松山市立内宮中学校

二年 浅野 遥斗

一瞬の不注意で、一生が終わる。日常が非日常に変わるのが、交通事故だ。ほんのわずかな気の緩み、不注意が、大事故を招く。

僕が、車の助手席でよく見る光景がある。横断歩道がない所で道路を横断する高齢者、通話をしながら車を運転している大人、携帯を操作しながら自転車に乗っている高校生、急に飛び出す子供、見かける度に残念な思いと共に腹立たしい気持ちでいっぱいになる。

なぜこのような行動をとってしまうのだろうか。

一つ目は、交通ルールに対する意識の低下である。高齢になると、足腰が弱くなり、できるだけ近道を探そうとする。視力・聴力などが衰え、車の存在に気づくのも遅れがちになる。また、稀に左右を確認せずに悠々と横断する高齢者もいる。身体的にそうなるのか、無意識に渡っているのか。これは、実際問題僕自身が年をとらないと分からないが、今できることは、若者が高齢者を守る他ないのではないだろうか。

二つ目は、運転することへの慣れだ。何年も運転していると、着信があると、つい電話に出てしまい、片手運転になりがちである。警察に、一度も捕まっていなかったり、危険な目に遭っていない人が油断し、このような行動をとってしまうのだろう。僕は、まだ運転免許をとっていないが、このような大人にはならないように、慎重な運転をしたいと思う。

三つ目は、前方不注意の危険をナメていることだ。高校生の自転車事故のうち約七割がスマートフォンを見ながらの運転など、法令違反を原因としている。僕は、もうすぐ高校生になる。自転車は、とても便利な反面、被害者にも加害者にもなる存在だ。充分に注意して、運転したい。

四つ目は、欠如した注意力や視野の狭さだ。小さい子供は、ボールを追いかけて死角から飛び出し、事故に遭うケースが多いそうだ。低学年ほど安全確認が手薄になり、出会い頭に衝突することが多い。そして、六歳くらいの幼児の平均的な視野は左右で九〇度程度、上下で七〇度程度とされている。一方大人は左右で一五〇度、上下で一二〇度ある。その差は、左右六〇度、上下五〇度も違う。妙に納得がいった。子供は、周囲が見えておらず車と接触してしまうということなのだ。子供を守るためには、何が必要か。まずは、大人が責任をもって守っていかなければならない。僕は、幼少期、外に出るときはいつも母と手をつないでいた。なぜなら、母に口から口すっぱく、

「外は危険がいっぱいだから、お母さんと手をつなぐのよ。」
と言われていた。だから、今でも家を一步出れば、危険が潜んでいるという意識になり、道路を横断する際には、左右確認はもちろん渡り切るまで、脇見運転車は無いか暴走車は無いか注意を払っている。大げさに聞こえるかもしれないが、これぐらいしないと最近のニュースなどで起きている事故を防ぐことはできないと思う。自分の身は自分で守るしかないのだ。

しかし、自分の力だけではどうにもできないこともある。それは、三年前に起きた東池袋自動車暴走死傷事故だ。老夫婦がランチの予

約時間に遅れ、三回にわたり車線変更、左カーブ付近で縁石に衝突したが、停止せず急加速し、交差点に突っ込み十一人が死傷した。今でも、衝撃的であの光景が脳裏に焼きついている。このような痛ましい事故が起きたのは、時間に余裕がなく急いでいたことと、高齢によるパニック状態によつて引き起こされたのだと思う。

この事故をきっかけに、高齢ドライバーの運転免許証の自主返納する動きが活発となった。事故を未然に防ぐことができる。誰しも加害者にも被害者にもなりたくないのだ。失った命は、決して戻らないということを、改めて一人一人が意識して、交通ルールを守りより良い社会を作っていかなければならないと強く思った。

近い将来、運転免許を取得したとき、交通ルールを遵守するのはもちろん、心に余裕を持つて行動し、「お先にどうぞ」という譲り合いの精神で、歩行者の安全を守りたいと思う。

社会全体で、歩行者、ドライバー全ての人を自分の一番大切な人だと思い、誰も悲しい思いをすることがないように、安全歩行、安全運転を呼びかけることが、明るい未来への第一歩だと思う。



免許返納のきっかけ作り

松前町立岡田中学校

三年 西岡 葵

みなさんは免許返納をするタイミングを何歳が適切だと考えますか？私はこの作文をきっかけに、いつ免許を返納するのが適切なのか考えてみることにしました。

まず、高齢者による交通事故について詳しく調べてみました。愛媛県の令和三年中における交通事故の発生件数は二二六〇件、そのうち全事故に占める高齢者事故は九六三件で、四二・六％でした。令和三年十二月末までの高齢運転免許保有者は二五七八三一人で愛媛県の免許保有者のうち二八・四％（約三割）が高齢者でした。高齢者による交通事故の主な要因は安全不確認や交差点安全進行、前方不注意など、運転者が気を付けていれば防ぐことができるものが多いと感じました。また全事故に占める高齢者事故の死者数は三三人で六六％も占めています。高齢者による事故が多くなっている中で、どうすれば減らせるのか、なぜ免許返納をする人が増えないのかについて調べてみることにしました。

大洲市に住む祖母は六八歳で車を運転しています。祖母によると、周りの人は八〇歳になっても無事故で運転しているそうです。ですが、八〇歳を超えると判断力がおとろえてきて事故が起りやすくなるので八〇歳になった時、免許を返納するか考えるそうです。私は祖母に、今、免許を返納して車が運転できなくなると困るかどうか聞いてみました。祖母は「困る」と即答しました。理由を聞いて

みると使える交通機関が少ないからだそうです。市内を走るバスは二時間に一本しか走っておらず、バス停まで遠くて、歩くしかできないので夏は暑く冬は寒いので大変だと言っていました。タクシーを使う手段もありますが出掛ける度に使うと高くなってしまう。なので車がないととても不便になってしまふなと思いました。運転能力や認知機能がおとろえるまでできる限り運転したいと祖母は話しています。そのために、栄養バランスの取れた食事を摂り、体を動かしたり、頭の運動をしたりしているそうです。どうすれば免許返納をしやすくなるかも聞いてみました。コミュニティバスを市が整備して、市の中心部にもっと行きやすくしたり、色んな場所で移動販売を行い様々な物が近くで買えるようになったりすると、車の運転が必要なくなるので免許返納がしやすくなると言っていました。免許を返納した後が不便なので、返納しても変わらない生活が送れる環境作りが大切なんだなと思いました。

内子町に住む祖母は七十二歳で原付を運転しています。車の免許は七二歳のとき、返納したそうです。免許返納をしようと思った理由は、あまり遠出をしないのと、家の近くに駅があるので不自由を感じていなかったからだそうです。また、車に乗っていないなかったので免許が必要なかったそうです。私はこの話を聞いて、交通機関が近くにあると利用しやすいので使える交通機関を市や町が増やしたり、駅やバス停の近くに住んだりすると、免許返納しやすくなるなと思いました。

私が、高齢者の事故のニュースでよく見聞きするのはブレーキとアクセルの踏みまちがえで、店に突っ込んだり、子どもの列に突っ込んだりするニュースです。特に印象に残っているのは東京の池袋

で二〇一九年四月に高齢者が運転する車が暴走し、母親と三歳の長女が死亡した事故です。当時車を運転していたドライバーの年齢は八五歳だったそうです。被告は初めアクセルを踏んでいないのに加速したと無罪を主張していましたが、その後事故原因はブレーキとアクセルの踏みまちがえと認定されました。この事故を受けて、昨年新たな免許制度が設けられ、運転免許更新時の技能検査が義務化されました。自分の運転能力がどれくらいなのかを調べられるというの自分自身にとっても、またその家族にとっても安心材料になるし免許返納のきっかけにもなるのでいいなと思いました。また、安全運転サポート車も増えてきており、その車だけを運転できる限定免許の創設も始まっているそうです。

このように、高齢者の事故を減らすため、さまざまな取り組みが社会全体で行われていることは大変いい事だと感じました。さらに、私の祖母のように技能の衰えを感じた高齢者がためらうことなく運転をやめられるように自由度の高い移動手段が確保されるのもいいなと感じました。私は今まで何となく高齢になると運転はしない方がいいと決めつけていたけど、祖母の話を知り、調べたりして免許返納しやすいような環境を周りが整備することでたくさんの方が気軽に免許返納しやすくなるのではないかなと思いました。また、家族が免許返納について話題を提示し、「免許返納しよう」と思うきっかけを作ると返納しやすくなると思います。私も免許返納のきっかけ作りをたくさんの人にしたいです。

「当たり前」と「思いやり」

大洲市立肱東中学校

三年 二宮 菜央

三十万五千四百二十五件。これは、昨年二十二年の交通事故発生件数だ。私も何度か危ない場面を体験したことがある。

ある朝のことだ。私は登下校の際、横断歩道を渡るのだが、ひやりとする出来事があった。それは、歩行者の信号が青になったため私が横断歩道を渡ろうとすると、車とぶつかりそうになったことだ。朝なのでドライバーは急いでいたのかもしれないがとても危ない。また、私自身も注意しなければと感じた。これまでは、信号が青になったらすぐに渡っていて、車は来ないと勝手に決めつけていた。これからは、しっかりと左右確認を行うべきだと感じさせられた。

また、私は歩行者を傷つけてしまうかもしれない立場でもある。私は自転車によく乗る。自動車と歩行者の事故だけでなく自転車と歩行者の事故も多い。このことを聞いたとき、私は思い当たることがあった。それは私が自転車で乗って習い事へ向かっていたときのことだ。私の前に犬の散歩をしている歩行者がいたため、私は追い抜いた。その時、歩行者をびっくりさせてしまったのだ。歩行者は私の存在に気付いていなかったためだ。私は追い抜く際、「すみません」と一言かけたり、自転車のベルを鳴らして自分の存在を知らせるべきだったと反省をした。もしあの時、犬が急に横に飛び出してきたり、急に止まってぶつかってしまったらと想像すると、自分の行動はとても危険なものだったと気づかされた。

これらとは対照に、ドライバーの優しさに助けられたこともある。信号のない横断歩道を渡るうとしている時、止まってくれるドライバーが多いと感じる。これに対して、私はそのドライバーに礼をする。このように、ドライバーと歩行者のいい関係がもっと増えていったらいいと思う。

私はこのような体験を実際にし、交通事故をなくしていくために大切なことを考えた。まずは、一人一人が交通ルールをしっかり守ることだ。「交通ルールを守る」こと。これは当たり前のことかもしれない。しかし、この「当たり前」がとても重要なのだと改めて感じた。小さな「ひやり」が大きな事故につながる前に、初心に帰って自分の行動を見直していくべきだと思う。

そして、「思いやり」の気持ちを持つことだ。自分中心の考え方をやめ、相手の立場に立って広い視野を持つこと。皆がこの温かい気持ちであれば、少しずつでも交通事故は減っていくだろうと思う。私が大人になり、車に乗るようになった際には、「思いやり」の気持ちで運転したい。

さらに、みんなで交通事故をなくしていくための取り組みを増やしていくことだ。私の町では、「児童生徒をまもり育てる日」という活動がある。これは、学校やPTA、地域住民、警察の方々が児童生徒の登下校を見守る活動日だ。この取り組みを通じて、子どもを守り育てることの大切さを県民に啓発している。最近、子どもの交通事故が多いと感じる。二十七年から二十二年の五年間で、交通事故により約二百二十人の子どもの死亡したそうだ。幼い子どもまでもの命を奪う交通事故を防ぐために、地域や町が一体となって子どもを守る取り組みをしていくべきだと思う。

最後に、交通事故を防ぐために私にできることを考えた。

まず、登下校や歩行中には、必ず安全確認を行うことだ。信号が青になってもすぐ渡らない、左右確認の徹底など基本的なことをしていきたい。

次に、自転車に乗る場合だ。ヘルメットの装着、左側通行、適切なスピードでの走行など、今まで以上に安全意識を持って運転したいと思う。

交通事故が多発している今、私はより一層交通ルールに気を付けて生活している。今は、自分の命を守ることだけで精いっぱいだが、将来は車に乗り、人の命も背負っているかもしれない。交通事故は時に自分の命を失い、時に人の命を奪ってしまうものである。当たり前のことを当たり前にすることで当たり前の生活が守られると思う。「当たり前」の行動と「思いやり」の意識を持ってこれからも安全行動に努めていきたい。



安全で幸せな暮らし

八幡浜市立保内中学校

三年 岡本 日風汰

僕たちの身近な移動手段には、自動車や自転車があります。父も母も自動車を運転しますし、兄も自転車で高校に通学しています。僕も、出掛ける時には自転車に乗ることがあります。最早、無いととても不便で、生活に欠かせないものです。しかし、毎日のニュースで、自転車や自動車の交通事故のことが流れない日はありません。便利ではありませんが、きちんとルールを守らないと、危険なものです。

僕も実際に危険な目にあったことがあります。小学校六年生の夏休み、飼育当番の日に自転車で学校に向かっていた時のことです。その日はとても天気が良くて、真夏の太陽がきらきらまぶしかったことを覚えています。車が一台やっと通れるくらいの細い道を直進していたときに、車が急にバックしてきました。結構、車との距離が近いところで進んでいたのですが、ブレーキが間に合いませんでした。とっさに左にハンドルを切りましたが、バランスを崩してしまい、自転車が車道側に倒れ、なんと車の下敷きになってしまいました。自転車はグシャグシャに壊れてしまいました。もし、自分が自転車側になっただけで済んでいたらと思うと、体が震えて、冷や汗が止まりませんでした。恐怖で足が一步も動かず、目の前が真っ白になり、周りの音も何も聞こえなくなったのを今でも覚えています。

今考えると、この事故も防げた事故でした。僕ができたことは、すぐに止まれる速度で走行すること、車との距離をきちんととること

とだったかなと思います。その時までには、毎日ニュースで流れる交通事故なんて遠い世界の他人事だったのですが、「自分が交通事故にいうことはない」というのは、過信だということに初めて気付きました。この根拠のない自信は何だったんだろうと自分自身を情けなく感じました。壊れたのは自転車だけだったので、まだよかったと周りの人たちみんなに言われました。このことがきっかけで、自転車に乗る時も、歩行者として歩く時も、交通安全に気を付けることを自分事として考えるようになりました。ルールを守っていても事故にあうことはあります。「大丈夫だろう」ではなく、「かもしれない」で先を考えて動くことが大切だと思います。

ぼくには、離れて暮らしている七十歳の祖父がいます。大きな病気などはなく、体は元気なのですが、だんだん視力が低下してきていて、運転に不安を感じてきているという話を聞きました。日々報道されている交通事故の中でも高齢者の事故が増えていて、大きな社会問題になっていくことは知っていました。安全確認がおろそかになったり、ハンドルやアクセル・ブレーキの操作ミスが大きな事故に繋がってきているようです。母は、「おじいちゃんも自信が無いのであれば、もう免許は返納した方がいいんじゃないの。」と言っており、僕もそれに賛成でした。自分は大丈夫という根拠のない自信こそが危険だということを僕が嫌と言うほど身をもって感じているからです。

しかし、祖父とその話をする中で、簡単に免許返納できない問題があることが分かりました。それは、地方では交通機関が少ないという事です。人口の多い都市部では、電車や地下鉄、バスなどの交通網が発達していて、自動車がなくとも容易に移動することがで

きます。僕の祖父も免許返納して自動車を運転することがなくなったら、日用品や食料品を買うだけで何時間もかかり、かなりの負担になることが予想できます。また、祖母は体調があまり良くなく、入退院を繰り返しています。夫婦でどちらかが病院に通いたいときにも自動車がないととても不便なのです。

免許返納したら、今までの生活と大きく変わってしまいます。具体的にどんなことが起こるのか見通しを持って、どうしても不便なことは、何とか社会でサポート体制を整えていくことがスムーズな免許返納に繋がるのではないかと思います。交通網が発達すればと思いますが、僕の街でも走っているバスにはあまり人が乗っていないことが多いように思います。公共の交通機関を利用する人が少なければ、なかなか交通網の発達は望めません。高齢者のいる家庭にきちんとお知らせして小さなバスを運行するとか、それぞれの家庭や地域でサポートタクシーが気軽に利用できるようにするなどの方法はどうかでしょうか。これから大人になる僕たちがいろいろな方法を考え、運転に自信がなくなっている方の免許返納が進むようになればと思います。

一人一人が安全に安心して暮らせる社会になるように、自分達も交通ルールを守るとともに、ますます進んでいく高齢化社会で、自分たちに何ができるかこれからも考えていきたいです。

交通事故は防げる

八幡浜市立松柏中学校

三年 節安 由珠

私は最近、幼い子どもが交通事故に遭ってなくなったというニュースを見ました。亡くなったのは、名古屋から家族で大阪に観光に来ていた一歳の女の子です。加害者の七十代の男性は女の子を車ではねた後、事故現場から逃走したそうです。事故が起きたのは大阪市で、男はその後、東大阪市で見つかりました。事故現場は飲食店が建ち並ぶ一方通行の道路で、事故の発生時間は車の通行が禁止されている時間帯だったそうです。

私は、この男性が通行禁止のルールを破らなければそもそも事故は起きていなかったと思います。さらに、女の子の大切な命を奪っておきながら、救護もせずにその場から逃走したことは許せないと思います。「怪我をさせた認識はない」とか「車検と自賠責保険が切れていたから逃げた」と供述していることも知りませんでした。私は、何も悪いことをしていないのに、事故に巻き込まれて命を奪われた女の子とその家族が本当にかわいそうで仕方ありません。

この事故のニュースをきっかけに、私は毎年全国でどれくらいこの件数の交通事故が発生しているのかを調べてみました。すると、二〇二一年には三十万五千四百二十五件もの事故が発生していることを知りました。私が予想していたよりもずっと多くて、とても驚きました。

交通事故に遭いやすいのは、一位が歩行中、二位が自動車乗車中、

三位は二輪車乗車中、四位が自転車乗車中だということもわかりました。バスや自動車が歩道に乗り上げて歩行者に怪我させるというニュースも、何度か目にしました。二〇一九年には、走行中の乗用車と軽自動車衝突し、横断歩道を渡るためにきちんと信号待ちをしていた保育園児ら十六人が事故に巻き込まれ、園児二人が亡くなるという痛ましい事故がありました。亡くなった二人の園児の家族はもちろんですが、その場にいた人たちの心にも大きな傷が残ったことでしょう。私はこの事故のことが、忘れられません。

自動車の事故以外にも、自転車の事故もたくさん起こっています。特に、自転車での事故は私たち中学生も加害者側になることが十分にありえます。最近では、自転車ですピードを出しすぎて、歩行者に怪我をさせてしまうという事故もよく耳にします。相手が重傷を負った場合や後遺症が残った場合などは、損害賠償として数千万円、なかには一億円近くの支払いが発生したというニュースを聞きました。私たち未成年には、これだけの金額は支払えないので、親が払うことになります。もちろん、お金の問題だけではありません。このような事故を起こすと被害者と被害者家族、自分の親、たくさんの人に迷惑をかけ、つらい思いをさせてしまいます。

私は、普段の通学は徒歩ですが、休日や下校後は、自転車に乗ることも多くあります。そこで、自転車での交通事故を起こさないようにするためには、どうすればいいかを考えました。まずは、交通ルールを守るのだと思います。例えば「止まれ」と書いてあるところや停止線や標識のある場所では必ずとまったり、左側通行を守ったりすることです。万が一事故に遭ってしまったときに、頭部への大きな怪我を防ぎ命を守るためには、ヘルメットをきちんとかぶること

も大切だと思います。

これらの交通ルールを繰り返し学ぶために、私の中学校では、年に一度交通安全教室が開かれています。今年は一学期にありました。この日は、全校生徒が普段乗っている自転車で学校に来て、自転車安全点検を受け、整備不良があれば自転車店で修理するようにします。また、実際に自転車で乗って地域を回って、道路標識の意味を学んだり、事前に習った手信号を使ってみたりします。普段何気なく通っている通学路も、ちょっと意識してみると、いろいろな道路標識がありました。手信号は運転しながら出すのが少し難しかったけど、自転車には車のような方向指示器がないので、どちらに曲がるのか止まるの手で示すことで、周囲の運転手や歩行者にも伝わるのでいいと思いました。このように、車でも自転車でも、スピードを出しすぎないことはもちろん、交通ルールを守ることや、道路標識の意味を知ることによって防げる交通事故はたくさんあると気付きました。これからも、時間の余裕と思いやりの気持ちを持ちながら、交通安全を心がけて生活していきたいです。



大切な命を守るために

愛南町立御荘中学校

三年 宮崎 逢乃

私の家族は、祖父母を合わせて七人家族です。祖父母は、私の家の隣に住んでいます。両親が働いているので、私たち姉弟三人は、幼い頃からたくさん祖父母に世話になっています。

平穏な毎日が続くなか、祖母が交通事故にあったのは三年前のことです。自分でもずっと車を運転していて、いつも元氣な祖母が事故に遭ってしまったのです。病院で変わり果てた祖母を見たときは、衝撃で涙が出そうになったのを覚えています。事故のショックからか、祖母の体は震えていました。そして、割れたガラスで切れたのか、顔の切り傷からは血が見えました。とても話せる状態ではなく、元の祖母に戻るのだろうか、不安で一杯でした。幸いなことに、命に別条はなく、手首の骨折と切り傷で済みました。

これまで、自分の身近な人が交通事故に遭ったことが無く、交通事故はどこか無関係のようなそんな気持ちでいました。この祖母の事故は、本当に衝撃的な出来事で、交通事故の怖さを実感した体験となりました。

祖母は、順調に回復し、家族で見舞いに行くと、会話ができたり、差し入れたものを喜んで食べたりできるようになりました。その後一ヶ月ほどで、退院することができました。しかし、事故に遭う前の祖母とは、少し変わってしまったように思います。あの事故から三年が経ちましたが、事故の後遺症なのか、いまだに病院に通うこと

があります。身体的な面もそうですが、精神的にも影響が出てきているように感じています。

今年も、二年間コロナの影響でできてなかった交通安全教室が、三年ぶりに全校を対象に開催されました。警察の方から話を聞いた後、自転車の乗り方の実習を行いました。私はバス通学なので、普段自転車で乗ることはほとんどありません。でも、他の友達のように自転車で通学したり、遊びに行ったりできたらいいなと思うことがあります。だから、実際に乗るときに困らないよう、友達に自転車を借りて実習を行いました。

自転車は誰もが気軽に乗ることができる、とても便利な乗り物です。しかし、使い方を間違えてしまうと、中学生の私たちが交通事故の加害者になり得るのです。このことをしっかりと自覚して、自転車で乗ることが大切だと思います。

毎日のように、交通事故のニュースがテレビで流れます。車同士の事故や車とバイクの事故、車と自転車の事故、車と歩行者の事故など様々ですが、はっと目に留まるのは、子どもが事故に遭ったというニュースです。特に、中高生がけがをしたり、命を落としたりするニュースを耳にすると、どきりとなります。自分と同年代の人の事故のニュースを知ると、祖母が事故にあったときのような感覚に似た感情になりました。

祖母の事故を経験したことで、交通事故は誰にでも起こり得ることだということを実感しました。だからこそ、誰もが、普段から気を付けなくてはならないのです。もし、自分だけでなく、自分の姉弟や友達など身近な人が事故に遭ったらと考えると、想像しただけでも涙が出そうになります。事故は本当に起きてはならない、起こつ

て欲しくないものだと思えます。

一人一人が交通事故の被害者にも加害者にもならないように、私も中学生として、できることを考えて実行していきたいです。



自転車に「TSマーク」を貼いましょう！！

◇ TSマークには保険が付いているので安心

- 年に1回、自転車安全整備店で、点検・整備を受けると、そのしるしとして「TSマーク」が自転車に貼付されます。
- 「TSマーク」には、賠償責任保険と傷害保険の2つがセットになった1年間の付帯保険が付いているので、もしもの時に安心です。
- お近くの自転車安全整備店へご相談ください。



◇ 付帯保険の補償内容が変更(H 29.10.1 ~)

補償内容	補償額等
① 賠償責任保険 (被害者が死亡等した場合に法律上の損害賠償責任を負った時の補償)	○ 死亡・重度後遺障害 (1~7級) 限度額 5千万円 ↓ (変更) 限度額 1億円
② 傷害保険 (自転車利用者が死傷等した時の補償)	○ 入院15日以上 10万円 ○ 死亡・重度後遺障害 (1~4級) 100万円
③ 被害者見舞金 (被害者が入院した時の見舞金)	○ 入院15日以上 10万円



「思いやり1.5m」運動の実践を！



愛媛県では、「愛媛県自転車の安全な利用の促進に関する条例」の基本理念として、歩行者・自転車・自動車等がお互いを思いやり、安全・快適に道路を共有する「シェア・ザ・ロード」の精神の普及に努めており、ドライバーの皆様には、自転車を追い越すときの事故防止のため、「思いやり1.5m」運動の実践を呼びかけています。

ドライバーの皆様は、自転車の側方を通過するときは1.5m以上の安全な間隔を保つか、道路事情等から安全な間隔を保つことができないときは徐行していただきますようお願いいたします。

交通安全協会のご紹介

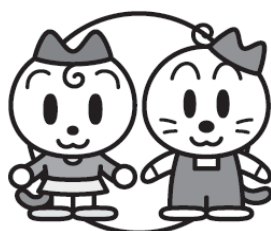
① 一般社団法人 愛媛県交通安全協会

松山市勝岡町1163-7 電話：089-979-2101

ホームページ：<https://www.ehime-ankyou.or.jp/>

② 各地区交通安全協会一覧表

協会名	所在地	電話番号
宇 摩	四国中央市三島中央5丁目4-20	0896-23-5331
新 居 浜	新居浜市久保田町3丁目9-8	0897-32-3260
西 条	西条市新田133-1	0897-55-9911
西 条 西	西条市周布349-1	0898-64-1661
今 治	今治市旭町1丁目4-2	0898-33-3466
伯方地区	今治市伯方町木浦甲4639-1	0897-72-2911
松 山 東	松山市勝山町2丁目13-2	089-941-7810
松 山 西	松山市須賀町5-36	089-951-1725
松 山 南	松山市北土居3丁目6-17	089-958-6558
久万高原	上浮穴郡久万高原町久万542-4	0892-21-0211
伊 予	伊予市下吾川960	089-982-7081
大 洲	大洲市東大洲1686-1	0893-25-0334
内 子	喜多郡内子町内子1432	0893-43-0116
八 幡 浜	八幡浜市広瀬2丁目1-5	0894-24-4895
西 予	西予市宇和町卯之町4丁目659	0894-62-9676
宇 和 島	宇和島市並松2丁目1-30	0895-23-0027
鬼 北	北宇和郡鬼北町大字芝225-1	0895-45-0277
南 宇 和	南宇和郡愛南町御荘平城2982-2	0895-70-1311



あんきょう

愛媛県交通安全協会・各地区交通安全協会

交通安全年間スローガン最優秀作

○ 子供の部門（小・中学生からの応募）過去十五年間の内閣総理大臣賞

平成	二十一年	じこがない	そんなまいにち	うれしいな	
同	二十二年	さあかくにん	ライト	ブレーキ	ヘルメット
同	二十三年	星キラリ	自転車ピカリ	帰り道	
同	二十四年	いそいでも	かならずかくにん	みぎひだり	
同	二十五年	ヘルメット	ぼくのだいじな	おともだち	
同	二十六年	につぼんを	じまんしようよ	事故ゼロで	
同	二十七年	ルールむし	しん号むしは	わるいむし	
同	二十八年	しんごうが	あおでもよくみる	みぎひだり	
同	二十九年	ペダルこぐ	免許はないけど	ドライブバー	
同	三十年	自転車は	車といっしょ	左側	
同	三十一年	とび出さない	いったんとまって	みぎひだり	
令和	二年	しつかりと	止まってかくにん	横だん歩道	
同	三年	自転車に	乗るならきみも	運転手	
同	四年	とうげこう	よそみ	おしゃべり	きけんがいつぱい
同	五年	ぺだるこぐ	ぼくのあいぼう	へるめつと	

～ 愛媛県交通安全協会ホームページ 広告協賛事業所 (限定100事業所) ～

【四国中央市】

金生運輸(株)
大王製紙(株)
丸住製紙(株)

【新居浜市】

一宮運輸(株)
(株)大石工作所
桑原運輸(株)
住友化学(株) 愛媛工場
住友共同電力(株)
住友金属鉱山(株) 別子事業所
住友重機械工業(株) 愛媛製造所
新居浜工場

宝運送(株)
東予信用金庫
日泉化学(株)
(株)三好鉄工所

【西条市】

(株)田窪工業所

【今治市】

(株)IJ C
今治造船(株)
今治ヤンマー(株)
岡山理科大学 今治キャンパス
四国ガス(株)
四国通建(株)
四国陸運(株)
瀬戸内運輸(株)
太陽石油(株) 四国事業所
波止浜興産(株)
BEMAC(株)
真鍋造機(株)

【松山市】

あいおいニッセイ同和損害保険(株)
愛媛支店

アカマツ(株)
アサヒビール(株) 松山支社
(株)アテックス
アトムグループ
(株)アベホンダHonda Cars 松山北
池田興業(株) 四国支店
(株)井関 松山製造所
(株)伊予銀行
NTT西日本 四国支店
(株)愛媛銀行
(株)愛媛CATV
(一社)愛媛県警備業協会
(一社)愛媛県指定自動車教習所協会
(一社)愛媛県自動車整備振興会
愛媛県遊技業協同組合
(株)愛媛新聞社
愛媛信用金庫
愛媛総合警備保障(株)
愛媛ダイハツ販売(株)
愛媛トヨタ自動車(株)
愛媛トヨペット(株)
愛媛日産自動車(株)
オオノ開発(株)
(株)門屋組
(株)上陣
(株)ガリレオコーポレーション
こくみん共済 coop 愛媛推進本部
JA共済連 愛媛
JAバンクえひめ
四国電力(株) 愛媛支店
四国名鉄運輸(株)
四国旅客鉄道(株)
JAF愛媛支部
(株)セキュリティエヒメ
(一社)全国道路標識・標示業
四国協会 愛媛県支部
全国農業協同組合連合会
愛媛県本部
(有)大豊陸送

(株)たいよう共済 愛媛支店
(株)タカラレーベン
帝人(株) 松山事業所
(株)テレビ愛媛
トヨタ L&F 西四国(株)
(株)トヨタレンタリース西四国
日本郵便(株) 四国支社
フェイス・ソリューション・
テクノロジーズ(株)
(株)フジ
(株)フジセキュリティ
(株)フードサポート四国
ヨシケイえひめ

三浦工業(株)
(株)村上モータース
(株)四電工 愛媛支店
(株)スズキ自販松山

【伊予市】
SANYOホールディングス(株)
マルトモ(株)

【伊予郡松前町】
東レ(株) 愛媛工場
日章(有)

【伊予郡砥部町】
医療法人 誠志会 砥部病院

【大洲市】
(株)一宮工務店

【八幡浜市】
(株)サンリード
八水蒲鉾(株)
堀田建設(株)

【宇和島市】
宇和島自動車(株)
宇和島信用金庫
ベルグアース(株)

令和4年12月1日現在 92事業所



交通安全活動を支援しています。
一般社団法人
愛媛県交通安全協会
Ehime Traffic Safety Association

〒799-2661 愛媛県松山市勝岡町1163-7

TEL: 089-979-2101